

平成 29 年度カット野菜・冷凍野菜・野菜惣菜
に係る小売販売動向調査

報 告 概 要

平成 30 年 7 月

独立行政法人農畜産業振興機構

目 次

I. 調査概要

- 1. 調査目的 1
- 2. 調査方法
 - (1) 調査対象期間 1
 - (2) 調査対象店舗 1
 - (3) 収集 POS データから関連データを抽出する方法 1
 - (4) POS データの分類方法 2
 - (5) POS データの出力項目及び集計方法 3

II. 調査結果の概要

- 1. 年次別推移
 - (1) アイテム数の推移 4
 - (2) 千人当たりの販売金額の推移 5
- 2. 月別平均販売価格の推移 6
- 3. 月別千人当たり販売金額の年次別推移
 - (1) カット野菜
 - ① サラダ 6
 - ② カット 8
 - ③ 惣菜サラダ 8
 - ④ キット 9
 - (2) 冷凍野菜
 - ① 冷凍 9
 - ② 冷凍調理 9
 - (3) 野菜惣菜 10
- 4. 品目別動向
 - (1) カット野菜
 - ① サラダ 11
 - ② カット 12
 - ③ 惣菜サラダ 12
 - ④ キット 14
 - (2) 冷凍野菜
 - ① 冷凍 15
 - ② 冷凍調理 15

(3) 野菜惣菜	
① 和惣菜	16
② 豆類（煮豆、惣菜豆）	17
③ 洋惣菜	17
④ 中華惣菜	18
5. 家計調査における購入動向	
(1) 生鮮野菜	19
(2) サラダ、冷凍調理、惣菜	22
6. 今後の野菜消費の動向	
(1) 年齢階層別野菜消費の動向	
① 生鮮野菜	24
② サラダ	25
③ 冷凍調理食品	26
④ 他の調理食品のその他（惣菜等）	27
(2) 今後の野菜消費	27
Ⅲ. 市場規模の推計	
1. カット野菜	29
2. 冷凍野菜	30
3. 野菜惣菜	30

I 調査概要

1. 調査目的

近年、家計において購入が増加しているカット野菜、冷凍野菜、野菜を主体とした惣菜（以下、「野菜惣菜」という。）について、平成21年から平成29年までのPOS（Point of Sales、販売時点情報管理）データを収集し、小売店における販売金額等の動向を調査することで、直近の需要動向を把握し、今後の野菜の需給安定の取組みに当たっての基礎資料とすることを目的として本調査を実施した。

なお、調査対象とした「カット野菜」「冷凍野菜」「野菜惣菜」の分類は以下のとおり。

1. カット野菜

- ① カット : 野菜を単にカット・パックしたもの（味付け等の調理のないもの）
- ② サラダ : サラダ用に野菜をカット・パックしたもの
- ③ 惣菜サラダ : サラダに味付け等の調理をしたもの（ポテトサラダを含む）
- ④ キット : 鍋セットなど調理に合わせた野菜等のセット
（2分の1カットや4分の1カット等単価の逡減等のためにカットした野菜を除く）

2. 冷凍野菜

- ① 冷凍 : 野菜をカット・冷凍しパックしたもの（味付け等の調理のないもの）
- ② 冷凍調理 : 野菜を主体とした冷凍調理食品（フライドポテトを含む）

3. 野菜惣菜

野菜を主体とした惣菜（和惣菜、煮豆、洋惣菜、中華惣菜、その他惣菜）

2. 調査方法

(1) 調査対象期間

平成21年1月から平成29年12月まで

(2) 調査対象店舗

㈱KSP-SP 及び㈱流通システム開発センターが収集している全国のスーパーマーケット（平成29年12月時点で150企業 約1,010店舗）。

(3) 収集POSデータから関連データを抽出する方法

JICFS分類^{*}の「生鮮食品」における「農産」の「その他農産」および「その他生鮮食品」、「冷凍食品」における「冷凍農産素材」および「冷凍調理」、「惣菜類」における「和惣菜」「洋惣菜」「中華惣菜」「その他惣菜」「サラダ」に属するPOSデータ（アイテム群）から、カット野菜、冷凍野菜、野菜惣菜に属するPOSデータ（アイテム群）を抽出。

(4) POS データの分類方法

抽出した POS データを以下のとおり分類した。

① カット野菜

ア. カット

「その他農産」に属し、商品名に野菜名称および「千切り、刻み、カット」等のワードが含まれているアイテムを「カット」に分類し、商品名に野菜品目名称があるアイテムは品目別の、無いアイテムは「ミックス」のカットとした。

イ. サラダ

「その他農産」に属し、商品名に野菜名称および「サラダ」というワードが含まれているアイテムを「サラダ」に分類し、商品名に野菜品目名称があるアイテムは品目別の、無いアイテムは「ミックス」のサラダとした。

ウ. キット

「その他農産」又は「その他生鮮食品」に属し、商品名に「炒め用」や「鍋用」などの用途のワードが含まれているアイテムを「キット」に分類し、商品名に野菜品目名称があるアイテムは品目別の、無いアイテムで野菜を使用しているものは「ミックス」のキットとした。

エ. 惣菜サラダ

「惣菜類」の「サラダ」に属し、商品名に野菜名称が含まれているアイテムを「惣菜サラダ」に分類し、商品名に野菜品目名称があるアイテムは品目別の、無いアイテムは「ミックス」の惣菜サラダとした。

② 冷凍野菜

ア. 「冷凍農産素材」に属し、商品名に野菜名称が含まれるアイテムを「冷凍」に分類し、商品名に野菜品目名称があるアイテムは品目別の、無いアイテムは「ミックス」の「冷凍」とした。なお、フライドポテトは、総務省家計調査年報の商品分類に基づき「冷凍調理」に分類した^(注1)。

イ. フライドポテトおよび、「冷凍調理」に属し商品名に野菜名称が含まれるアイテムを「冷凍調理」^(注2)に分類し、商品名に野菜品目名称があるアイテムは品目別の、品目を特定できないアイテムは「その他冷凍調理」とした。

③ 惣菜

「和惣菜」「洋惣菜」「中華惣菜」「その他惣菜」「煮豆」に属し、商品名に野菜名称があるアイテムまたは、「なます」等の野菜を主体とした惣菜のアイテムを「野菜惣菜」に分類し、商品名に野菜名称があるアイテムを品目別の「野菜惣菜」^(注3)、品目を特定できないアイテムは「その他野菜惣菜」とした。

(5) POS データの出力項目及び集計方法

出力項目及び集計方法は表 1 のとおり。

表 1 POS データの出力項目及び集計方法

項目	月別データ	年別データ
アイテム数	商品コードの集計値	合計値は、月別の重複を避けた値
販売金額（税抜、円）	販売金額の集計値	月別集計値の合計
来店客数	全店舗来店客数	月別集計値の合計
千人当たり販売金額（税抜、円）	月別販売金額の合計を月別来店客数で除して 1000 を乗じた値の集計値 <small>（地域や業態の規模、収録店舗数の変動に影響なく商品の売れ行きを計ることができる指標）</small>	年間販売金額の合計を年間来店客数で除して 1000 を乗じた値の集計値

※ JICFS とは、JAN Item Code File Service の略称で、財団法人流通システム開発センターが管理運営を行う「JAN コード商品情報データベース」システムを指し、JICFS 分類は、本データベースに収録された JAN コード商品情報を効率よく利用できるように設定された JICFS 用の商品分類コード。

(留意事項)

本調査の使用に際しては、集計に用いた POS データには、コンビニエンスストア、大型総合スーパーのデータが含まれていないことを留意する必要がある。

II 調査結果の概要

1. 年次別推移

(1) アイテム数の推移

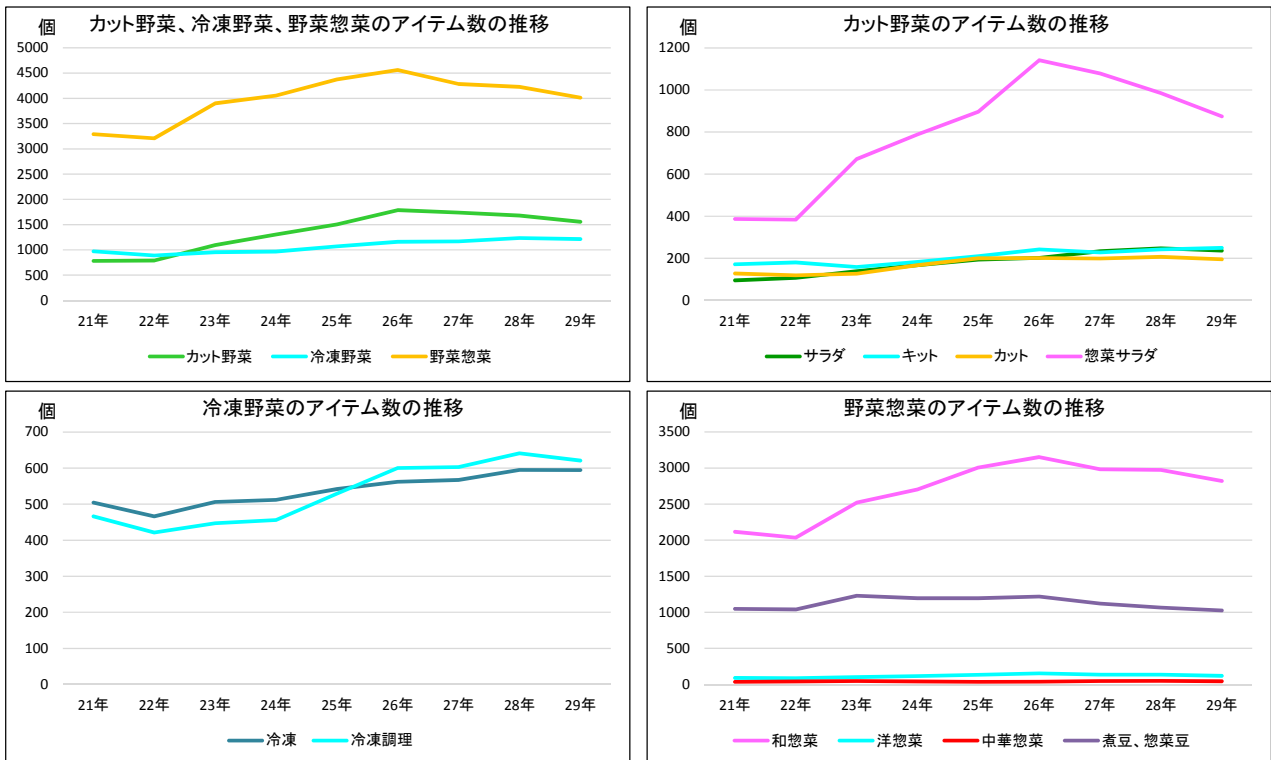
カット野菜、冷凍野菜および野菜惣菜のアイテム数は、平成23年から26年までは、需要の増加、プライベートブランドの普及等により増加傾向であったが、27年以降は商品の集約化により減少傾向となっている。

分類別で見ると、カット野菜では、サラダ用に複数の野菜をパックした「サラダ」は増加傾向で推移していたが29年は小幅の減少に転じ、「サラダ」に味付け等の調理をした「惣菜サラダ」は、23年から26年までは大幅な増加傾向であったが27年以降は減少傾向に転じている。調理用に複数の野菜等をパックした「キット」および千切りキャベツなど一品目の野菜をパックした「カット」は、ともに増加傾向から27年に減少した後、「キット」は緩やかな増加傾向に転じ、「カット」は28年に増加に転じたものの29年は再び減少している。

冷凍野菜では、冷凍ほうれんそうなど一品目を冷凍した「冷凍」および野菜を主体とした冷凍調理食品の「冷凍調理」は、22年までは冷凍企業・工場の減少などから減少傾向であったが、23年から26年は増加傾向に転じ、27年～28年は緩やかな増加傾向で推移し、29年は、冷凍は前年並み、冷凍調理は減少に転じている。

野菜惣菜では、和惣菜が23年から26年は増加傾向であったが27年以降は減少傾向に転じ、豆類（煮豆+惣菜豆）は増加傾向から24年以降に緩やかな減少傾向に転じ、洋惣菜と中華惣菜は、ほぼ横ばいで推移している。

図1 アイテム数の年次別推移



(2) 千人当たり販売金額の推移

千人当たり販売金額は、カット野菜および野菜惣菜においては、28年までは増加傾向で推移していたが、29年は野菜惣菜が小幅の減少、カット野菜が減少に転じている。冷凍野菜は、23年まで増加傾向で推移し、24年以降はほぼ横ばいで推移している。

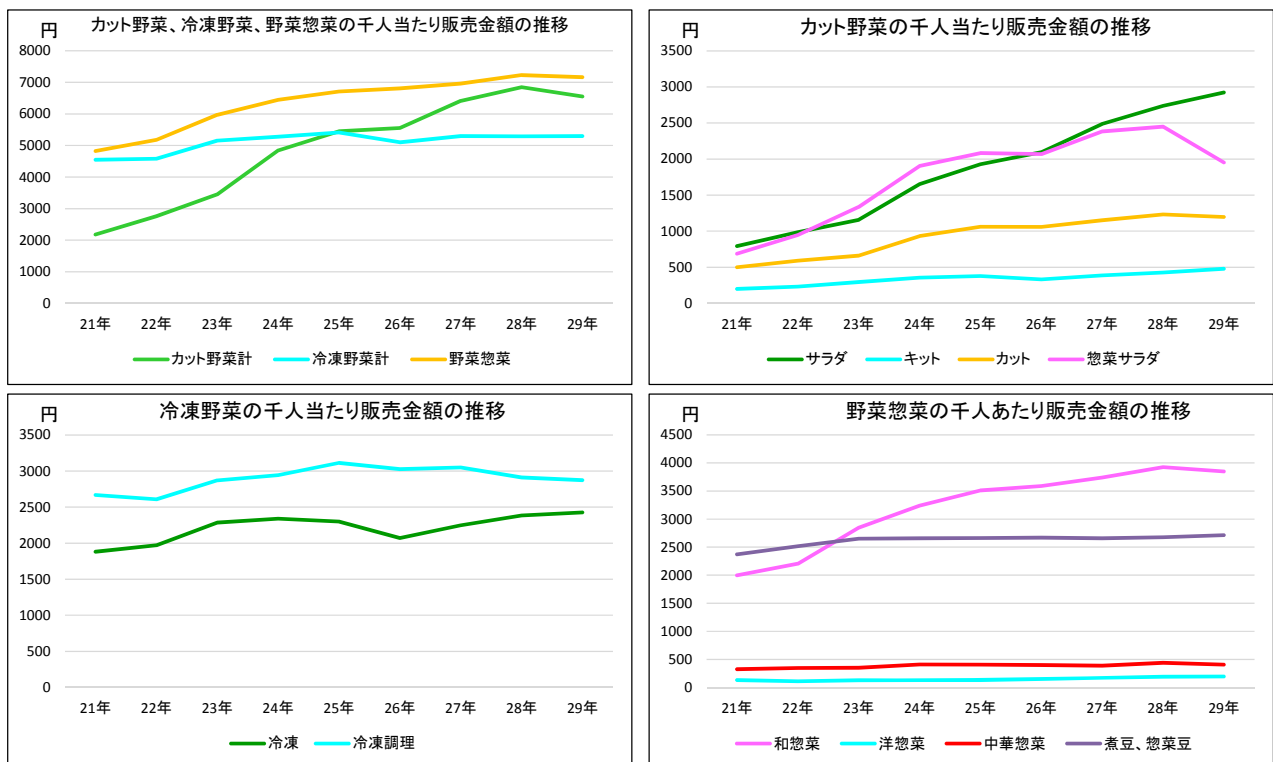
分類別で見ると、カット野菜では、「サラダ、惣菜サラダ、カット、キット」のいずれも28年まで増加傾向であったが、29年においては、「惣菜サラダ」が大幅な減少、「カット」が小幅の減少に転じ、「キット」は緩やかな増加傾向、「サラダ」は大幅な増加傾向が継続している。

冷凍野菜では、「冷凍」が、増加傾向から25年に減少に転じ、26年は農薬混入事件により大きく減少したが、27～29年は、天候不順による生鮮野菜の価格高騰から、生鮮野菜から冷凍野菜への代替需要により増加傾向に転じている。「冷凍調理」は、減少傾向から22年に増加傾向に転じたが、26年以降は緩やかであるが再び減少傾向に転じている。

野菜惣菜では、「和惣菜」および「豆類（煮豆、惣菜豆）」が販売金額の太宗を占めており、「和惣菜」は、増加傾向から29年は小幅の減少に転じ、「豆類」は、増加傾向から27年に減少したものの28年以降では緩やかであるが増加に転じている。

「洋惣菜」は、緩やかな増加傾向で推移しており、「中華惣菜」は、緩やかな増加傾向で推移していたが、29年においては小幅の減少に転じている。

図2 カット野菜、冷凍野菜、野菜惣菜に係る千人当たり販売金額の推移



2. 月別平均販売価格の推移

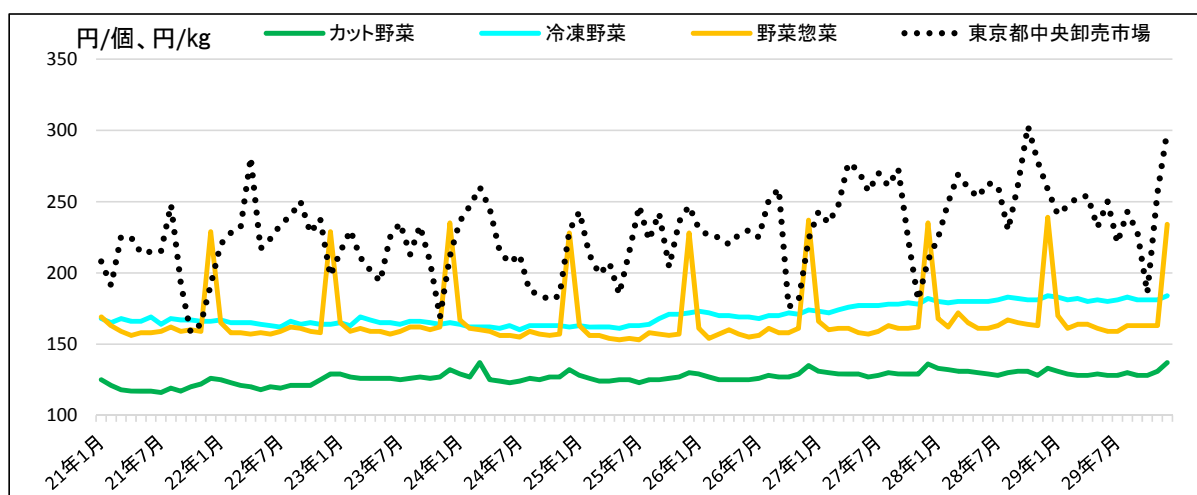
販売金額を販売個数で除した平均販売価格は、カット野菜、冷凍野菜では緩やかな上昇傾向、野菜惣菜では12月がパーティーや正月向けの商材により大きく上昇するものの12月以外では変動は小さく緩やかな上昇傾向で推移している。

カット野菜、冷凍野菜、野菜惣菜の販売価格は、原料野菜価格の高騰時には内容量の調整、原料野菜の構成の調整等が行われることがあるため正確な時系列の比較は出来ないが、1個当たりの平均販売価格を見ると、野菜惣菜の12月を除き、緩やかな上昇傾向で推移している。

カット野菜、冷凍野菜、野菜惣菜における分類別の平均販売価格は、生鮮野菜の購入価格が高値で推移した月が多かった27年～29年では(図5)、いずれの分類別の平均販売価格は上昇しているものの小幅な上昇にとどまっており、各分類の平均販売価格においては、季節や気象による原料野菜の価格変動の影響は小さい。

原料野菜の価格は季節的又は気象要因による変動があるものの、これらの商品は安定した価格での販売が強みと考えられることから、カット野菜、冷凍野菜、野菜惣菜における原料野菜の価格変動の製品価格への影響は小さいと推察される。

図3 カット野菜、冷凍野菜、野菜惣菜の月別平均販売価格の推移



資料：東京都中央卸売市場年報

3. 月別千人当たり販売金額の年次別推移

(1) カット野菜

① サラダ (サラダ用に複数の野菜をカット・パックしたもの)

サラダの月別千人当たり販売金額の年次別推移を見ると、生鮮野菜の価格変動(図5)にかかわらず増加傾向で推移し、特に生鮮野菜の購入価格が上昇した27～28年においては大幅な増加となっており、29年においては、生鮮野菜の価格が下落した10月を除き、いずれの月も対前年同月を上回っている。

家計における生鮮野菜の購入価格とサラダの購入の関係を、生鮮野菜の購入価格(総務省、

家計調査における生鮮野菜の購入価格（きのこ類、もやしを除く）と千人当たり販売金額の相関係数（21年1月～29年12月）で見ると、千人当たり販売金額が増加傾向（需要が増加傾向）にある中で0.61と強くはないものの、生鮮野菜の購入価格が上昇した時には、千人当たり販売金額が増加するプラスの相関を示しており、生鮮野菜の購入価格上昇時にはサラダの購入は増加することを示している。

図4 サラダの月別千人当たり販売金額の年次別推移

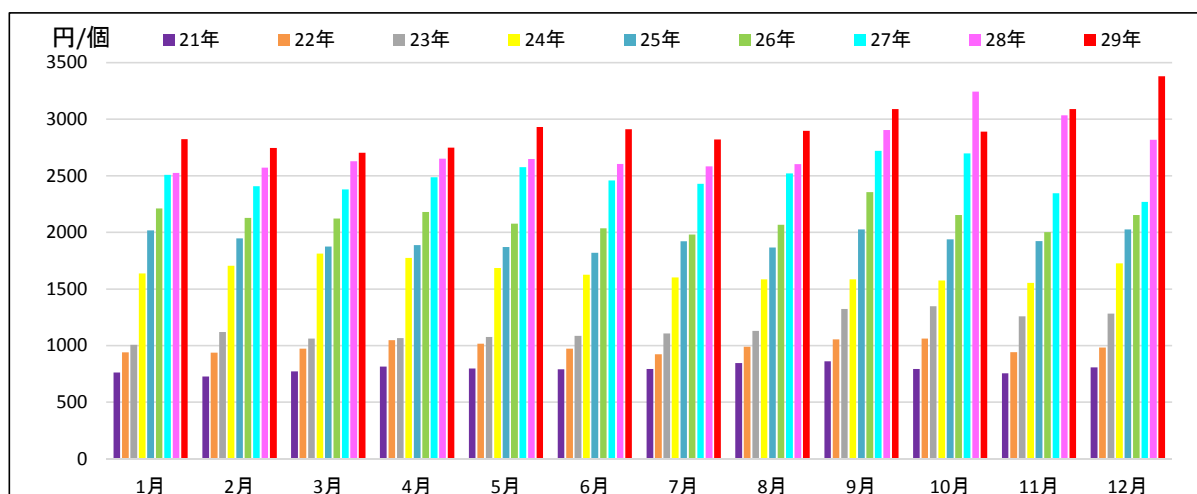
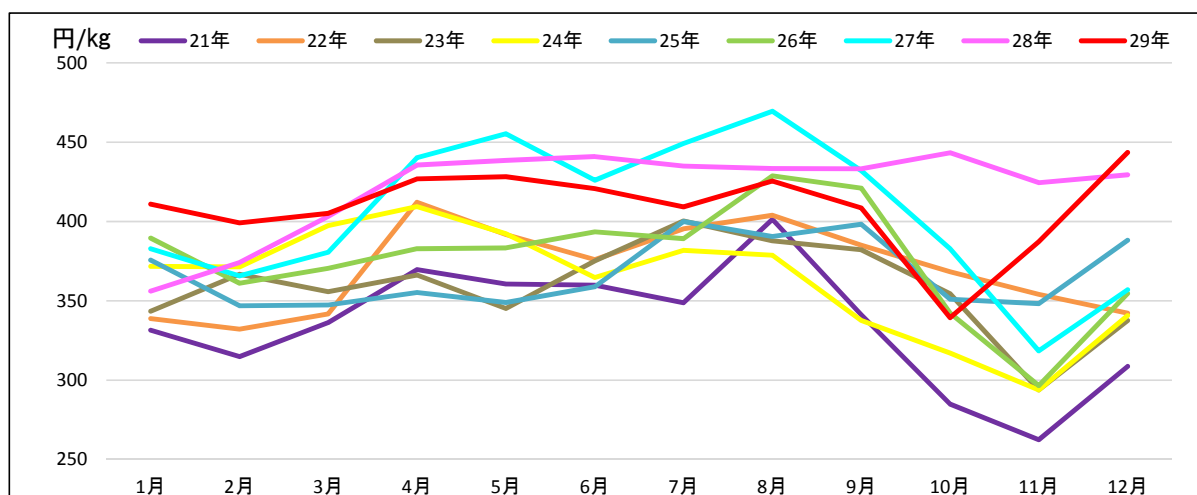


図5 家計調査 生鮮野菜の月別購入価格の推移



総務省、家計調査年報

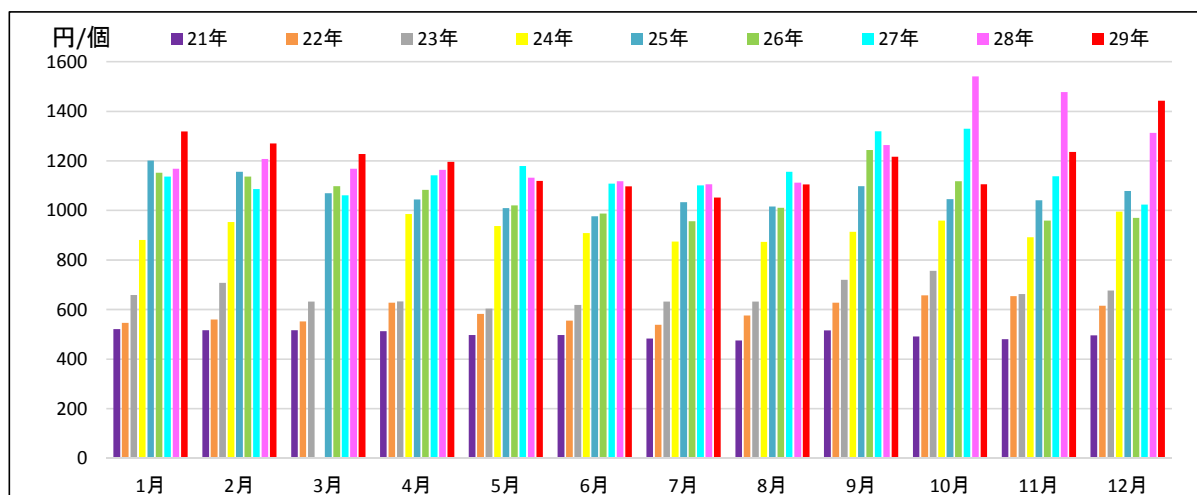
注1：もやし、きのこを除く生鮮野菜の購入価格

2：生鮮野菜購入数量・金額には、カット（千切りキャベツなどの単品のカット野菜）と冷凍（冷凍ほうれんそうなどの単品の冷凍野菜）が含まれる。

② カット（千切りキャベツなど一品目の野菜をカット・パックしたもの）

カットは、25年まではいずれの月も対前年同月を上回って推移していたが、26年以降においては、増加または減少して推移している。家計における生鮮野菜の購入価格とカットの千人当たり販売金額の相関係数（21年1月～29年12月）は、0.55と強くはないもののプラスの相関を示している。家計におけるカットの購入は、安定した価格、高い利便性などから増加傾向で推移していたが、26年以降では、安定した需要があるなか、生鮮野菜の購入価格の変動により増減していると推察される。

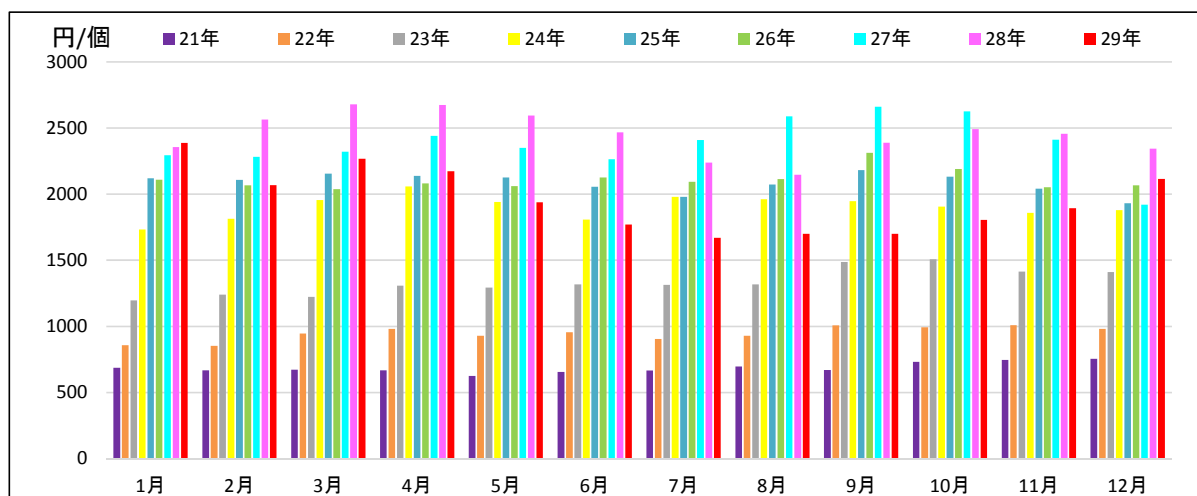
図6 カットの月別千人当たり販売金額の年次別推移



③ 惣菜サラダ（サラダに味付け等の調理をしたもの）

惣菜サラダは、カットと同様に25年まではいずれの月も対前年同月を上回って推移していたが、26年以降においては、生鮮野菜の購入価格が上昇した月には増加、下落した月には減少するなどの変動に転じ、29年2月以降では減少に転じている。

図7 惣菜サラダの月別千人当たり販売金額の年次別推移



29年は、生鮮野菜の購入価格が高値で推移するなか、カット野菜の千人当たり販売金額

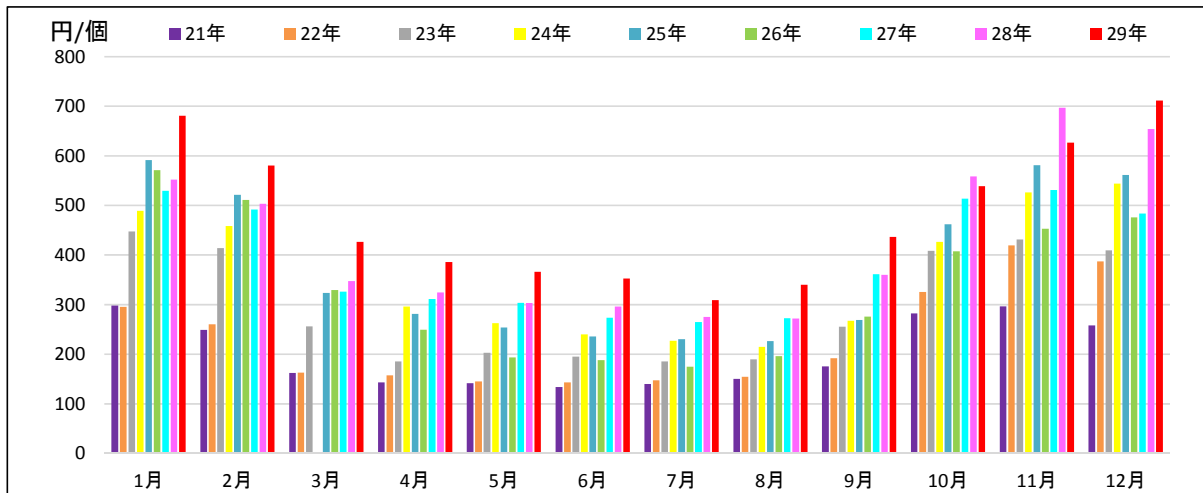
は、カットが安定して推移し、サラダが大幅な増加したなか、惣菜サラダは大幅な減少となっていることから、惣菜サラダの需要はサラダにシフトしたと推測される。

なお、家計における生鮮野菜の購入価格と惣菜サラダの千人当たり販売金額の相関係数（21年1月～29年12月）は、0.50と強くはないもののプラスの相関を示している。

④ キット

一方、キットは、冬季の鍋物需要を背景に1月～2月および10月～12月の購入が多く、季節による変動が大きい。

図8 キットの月別千人当たり販売金額の年次別推移



(2) 冷凍野菜

① 冷凍（冷凍ほうれんそうなど一品目の野菜を冷凍パックしたもの）

冷凍の月別千人当たり販売金額の年次別推移を見ると、26年は農薬混入事件により各月とも減少傾向となったものの、生鮮野菜の購入価格が上昇した27年～28年では総じて各月とも増加傾向で推移している。29年においては、生鮮野菜の購入価格が下落した9月～11月においては前年を下回り、価格が上昇した他の月は前年を上回っている。

② 冷凍調理（野菜を主体とした冷凍調理食品（フライドポテトを含む））

冷凍調理の千人当たり販売金額は、農薬混入事件において一部品目において減少したものの、きんぴらなどの野菜をミックスした製品への影響は比較的小さく、安定して推移していたものの、26年～27年以降においては、野菜惣菜との競合もあり減少傾向に転じている。

生鮮野菜の購入価格と冷凍野菜の千人当たり販売金額との相関係数（21年1月～29年12月）は、冷凍が0.83、冷凍調理が0.22と、冷凍が強いプラスの相関を示している。保存ができて調理が簡便な冷凍は、生鮮野菜の購入価格の上昇時には生鮮野菜の代替需要により増加するものと推察される。

図9 冷凍（単品の冷凍野菜）の月別千人当たり販売金額の年次別推移

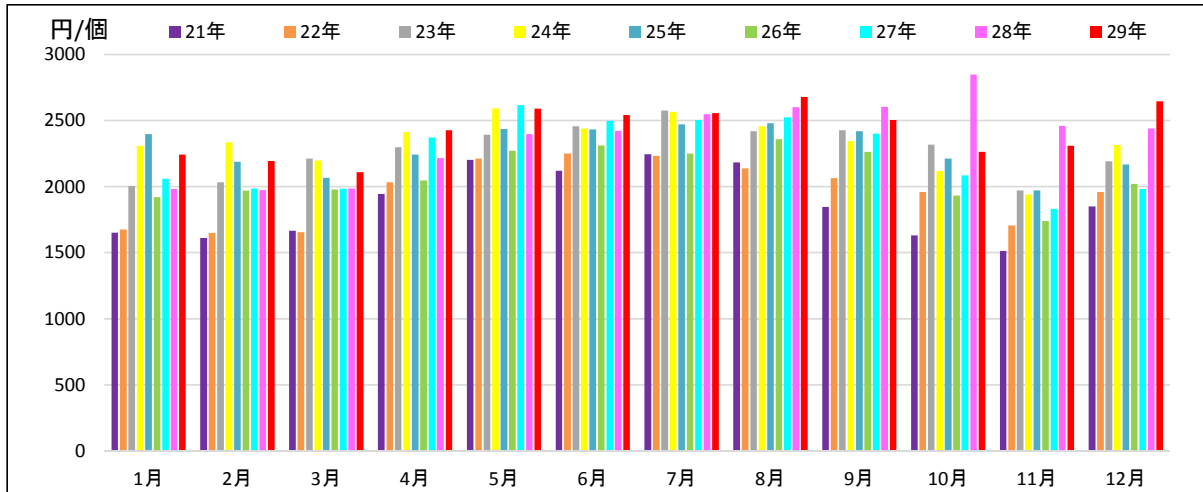
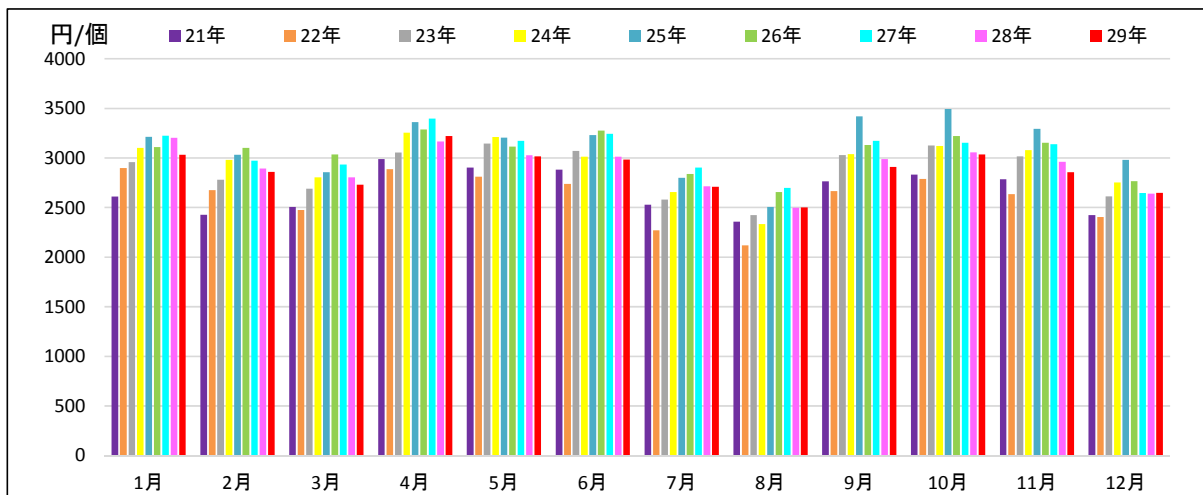


図 10 冷凍調理（野菜が主体の冷凍調理食品）の月別千人当たり販売金額の年次別推移

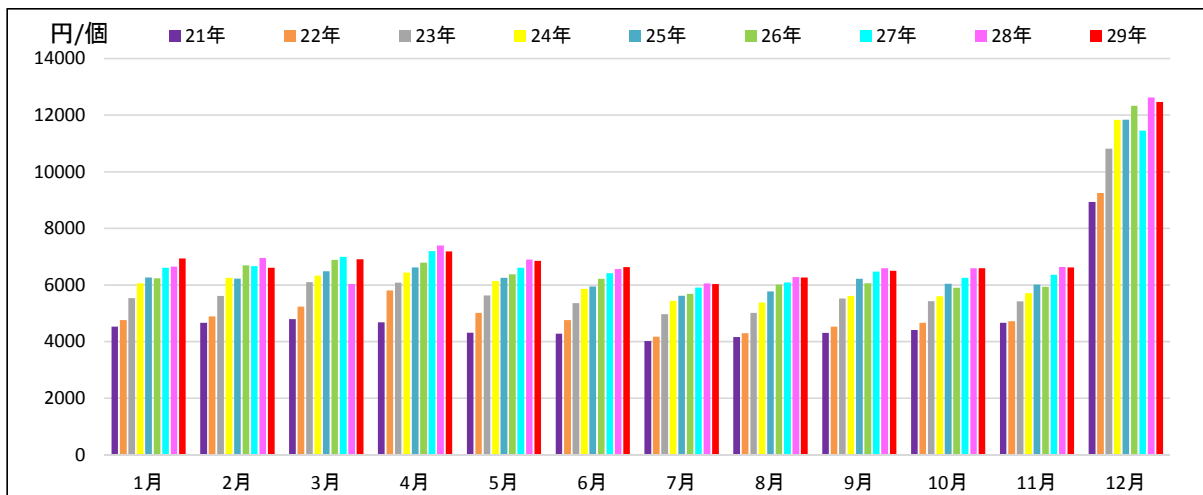


(3) 野菜惣菜

野菜惣菜の月別千人当たり販売金額の年次別推移を見ると、パーティーや正月用の需要が増加する12月を除いて安定して推移している。

経年で見ると、24年までは総じて増加傾向であるが、25年以降は緩やかな増加傾向となっている。

図 11 野菜惣菜（野菜が主体の惣菜）の月別千人当たり販売金額の年次別推移



4. 品目別動向

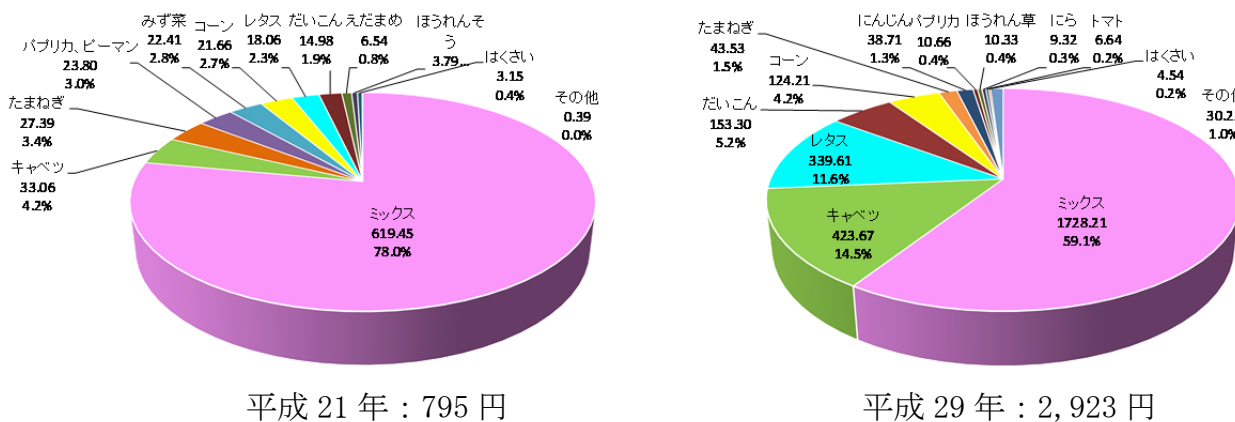
(1) カット野菜

① サラダ

サラダの千人当たり販売金額は、21年795円から28年2,739円と244%増の大幅な増加となり、29年も2,923円と大幅に増加した。主な品目は、「ミックス」、次いで「キャベツ、レタス、だいこん、コーン、たまねぎ」などである。増加している品目は、「ミックス、キャベツ、レタス、だいこん、コーン、にんじん」などである。販売金額が少ない「にんじん、ブロッコリー」などは、洋風サラダなどの「ミックス」での購入が多いと推察される。減少している品目は、「水菜、パプリカ（ピーマンを含む）、えだまめ」などである。

29年において、28年と比較して増加した品目は、「レタス、コーン、だいこん、ミックス、にんじん」などであり、減少したのは、「たまねぎ、キャベツ」などである。

図 12 サラダの品目別千人当たり販売金額

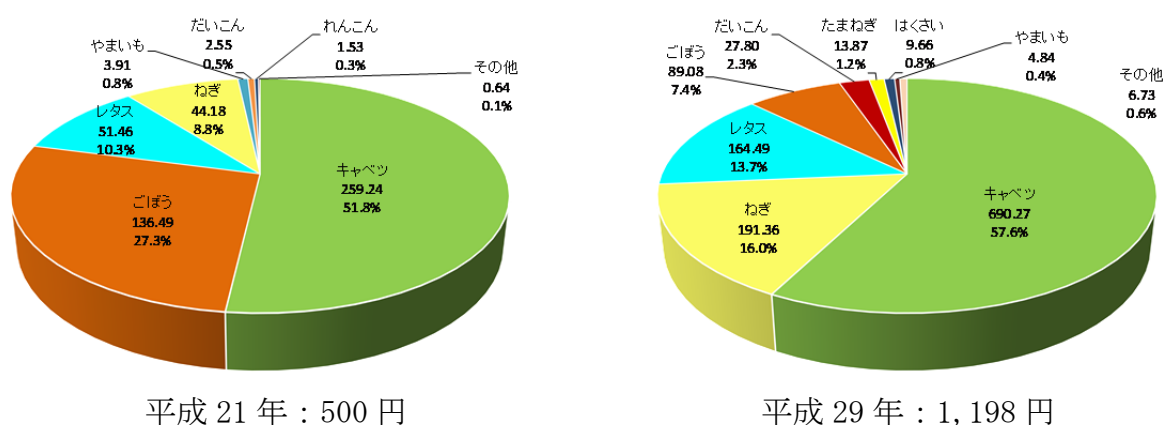


② カット

カットの千人当たり販売金額は、平成21年500円から平成29年1,198円と140%の大幅な増加となっている。主な品目は、「キャベツ」、次いで「ねぎ、レタス、ごぼう、だいこん、たまねぎ」などである。増加している品目は、「キャベツ、ねぎ、レタス、だいこん、たまねぎ、はくさい」など、減少している品目は「ごぼう」などである。

29年は、28年の1,232円から若干の減少となった。増加した品目は「ねぎ、だいこん」などであり、減少したのは「キャベツ、レタス」などである。

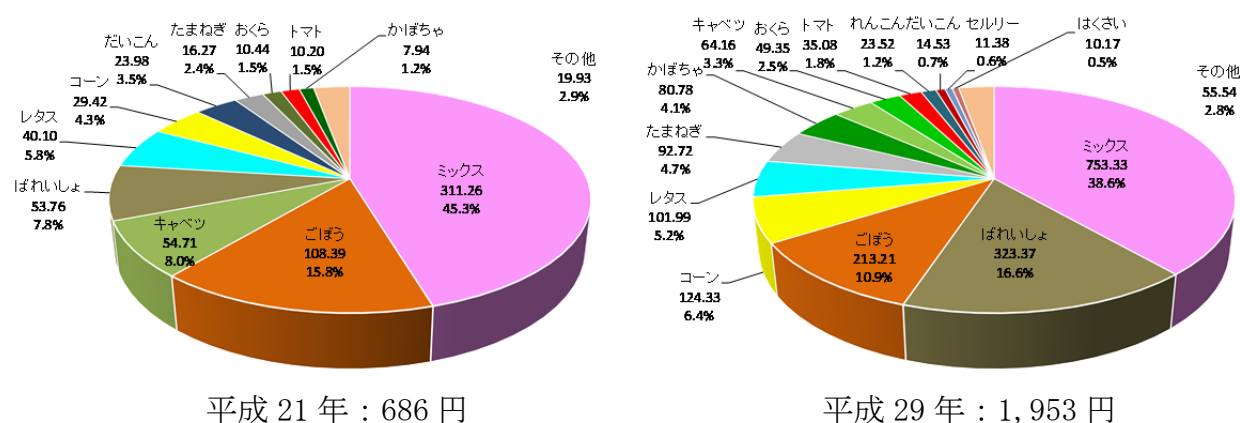
図13 カットの品目別千人当たり販売金額



③ 惣菜サラダ

惣菜サラダにおける主な品目は、「ミックス」、次いで「ばれいしょ、ごぼう、コーン、レタス、たまねぎ、かぼちゃ」などである。増加している品目は、「ミックス、ばれいしょ、ごぼう、コーン、たまねぎ、かぼちゃ、レタス、おくら、トマト、れんこん、セルリー」などである。

図14 惣菜サラダの品目別千人当たり販売金額



惣菜サラダの年次別千人当たり販売金額は、21年の686円から29年の1,953円と、185%の大幅な増加となっているが、29年は28年の2,449円と比べると20.3%の大幅な減少となっている(図2)。これを品目別に見ると、最も販売が多いミックスが28年1,100円から29

年 753 円、販売第五位のレタスが同 175 円から 102 円と、この二品目が大きく減少している。

ここで、品目別の販売価格の年次別比較は各年次の販売製品構成が異なるなどにより難しいが、この二品目の 28 年と 29 年の年次別平均販売価格を見ると、レタスが同 169 円から 194 円、ミックスが同 130 円から 150 円と上昇している。

一方、サラダにおける当該二品目の 28 年と 29 年の年次別平均販売価格を見ると、ミックスが 150 円と変わらず、レタスは原料価格（卸売価格）の下落もあり 28 年 153 円から 29 年 131 円と小幅ながら下落しており、当該二品目の年次別千人あたりの販売金額は、ミックスが同 1,696 円から同 1,728 円、レタスが同 237 円から同 340 円と増加している。

サラダ全体（サラダ+惣菜サラダ）の需要は、消費者の価格訴求は依然として強いと推察され、販売価格が上昇した惣菜サラダ（28 年 139 円→29 年 150 円）から、販売価格が惣菜サラダより割安で安定しているサラダ（同 138→同 132 円）にシフトしたと推察される。

図 15 ミックスの月別千人当たり販売金額

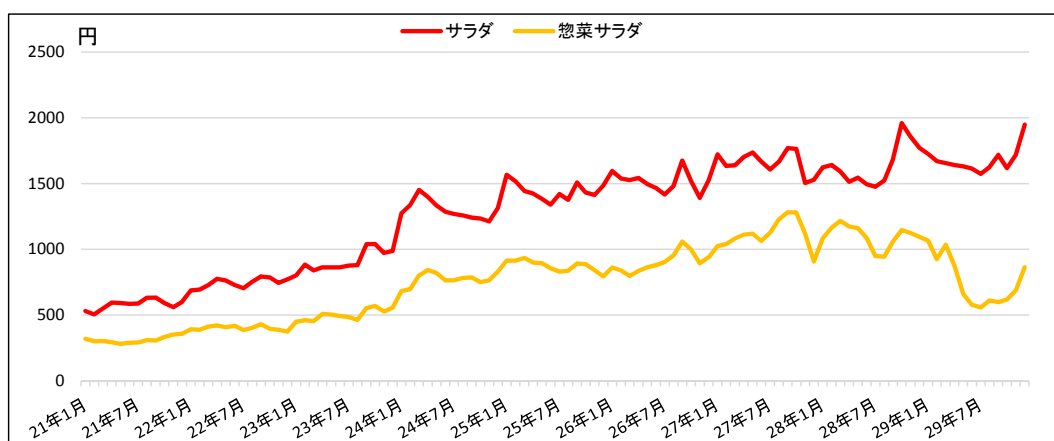
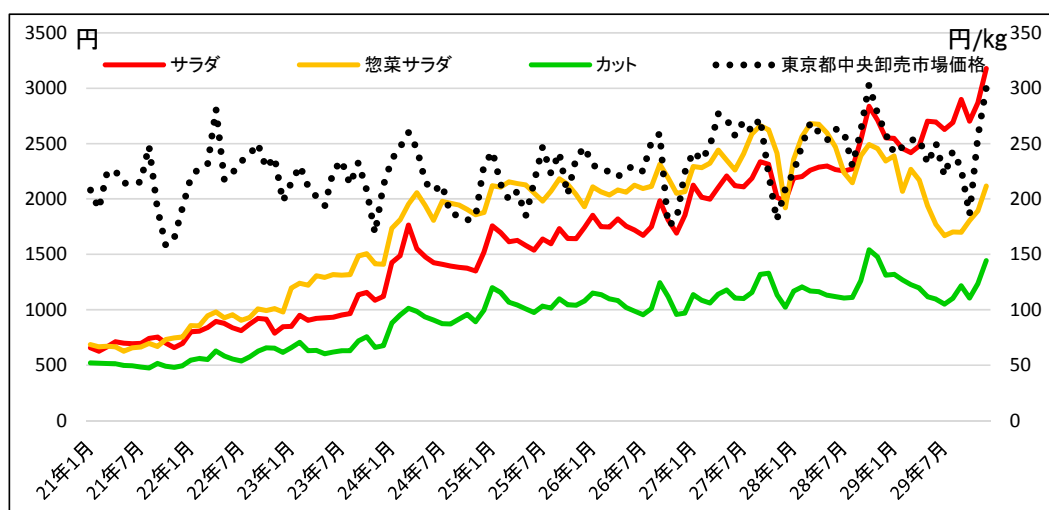


図 16 レタスの月別千人当たり販売金額



④ キット

キットの千人当たり販売金額は、平成 21 年 201 円から平成 29 年 478 円と、138%の大幅な増加となっている。

主な品目は、「ミックス」、次いで「にら、キャベツ、はくさい、さといも、ごぼう」などである。増加している品目は、「ミックス、にら、はくさい、さといも」など、減少している品目は、「キャベツ」などである。ミックスでは鍋物用、その他では炒め用のキットの販売が多い。

カット野菜について、加工形態別に増加している品目を見ると、一品目の野菜をカット・パックしたカットと、複数の野菜をカット・パックしたサラダ・惣菜サラダ・キットの両方が増加しているのは「キャベツ、レタス」、カットが増加しているのは「ねぎ」、サラダ・惣菜サラダ・キットが増加しているのは「ばれいしょ、コーン、だいこん、にら、ごぼう、たまねぎ、かぼちゃ、おくら、はくさい、トマト」などである。

図 17 キットの品目別千人当たり販売金額

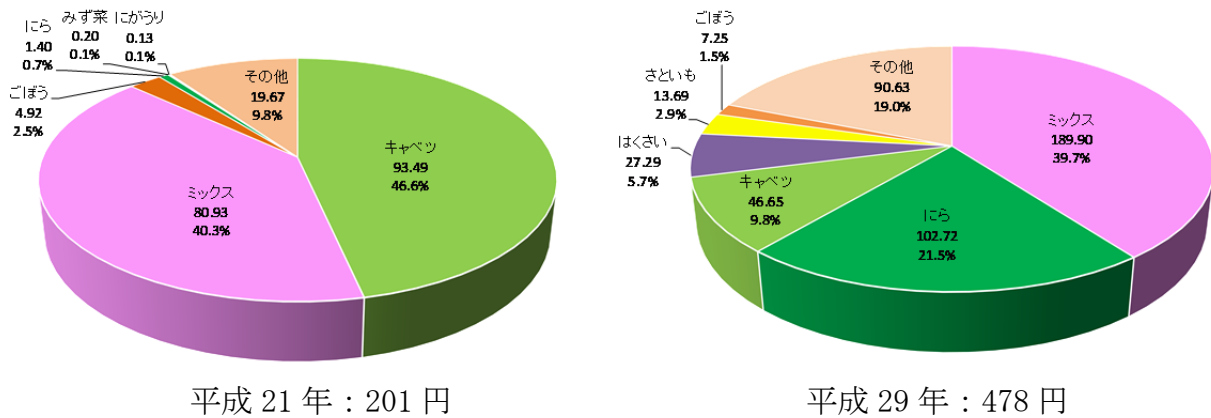
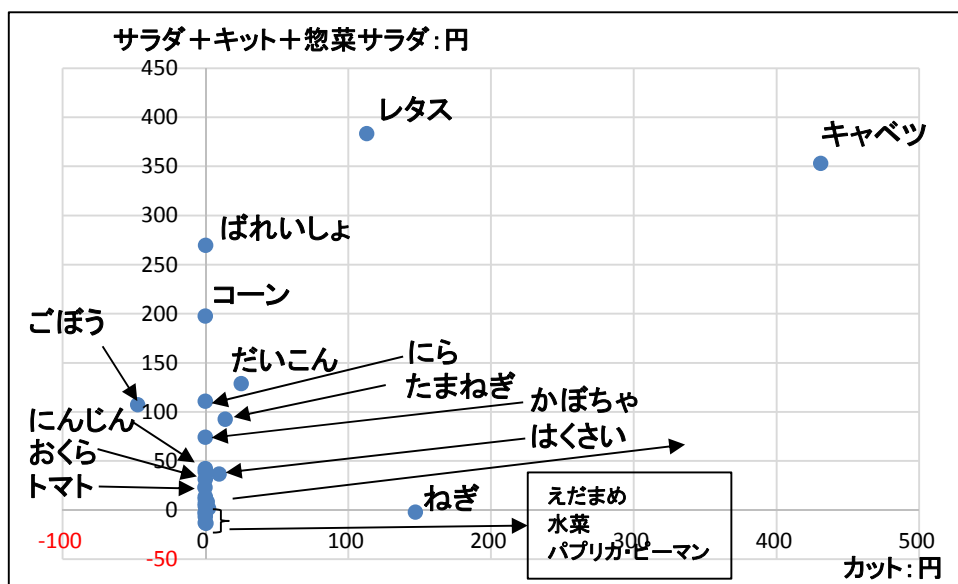


図 18 カット野菜の千人当たり販売金額の増減額 (29 年マイナス 21 年)



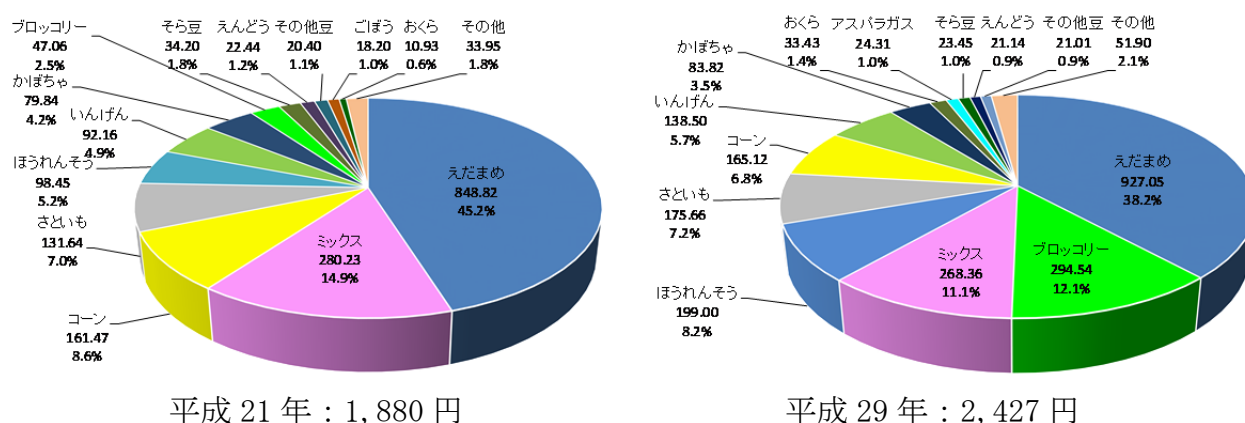
(2) 冷凍野菜

① 冷凍

冷凍における千人当たり販売金額は、平成 21 年 1,880 円から平成 28 年 2,427 円と 29.1% の増加となっている。主な品目は、「えだまめ、ブロッコリー、ミックス、ほうれんそう、さといも、コーン、いんげん、かぼちゃ」などである。

増加している品目は、「ブロッコリー、ほうれんそう、えだまめ、いんげん、さといも、おくら、アスパラガス」などであり、減少しているのは、「ミックス、そら豆、ごぼう」などである。増加している「えだまめ」では「茶豆」が増加し、減少している「ミックス」では、和風・洋風ミックスが増加し、ミックスベジタブルが減少している。

図 19 冷凍の品目別千人当たり販売金額



② 冷凍調理

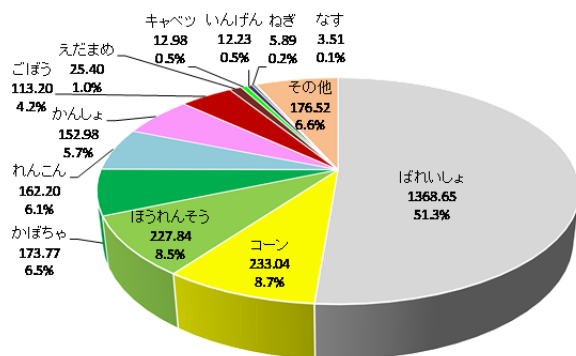
冷凍調理における千人当たり販売金額は、平成 21 年 2,668 円から平成 28 年 2,872 円と 7.6% の増加となっている。主な品目は、「ばれいしょ、ほうれんそう、コーン、れんこん、かぼちゃ、かんしょ、ピーマン (パプリカを含む)」などである。

増加している品目は、「ほうれんそう、ばれいしょ、ピーマン、さといも、なす、ねぎ、キャベツ、やまいも」などであり、減少しているのは、「ごぼう、かんしょ、コーン、かぼちゃ、えだまめ、れんこん」などである。

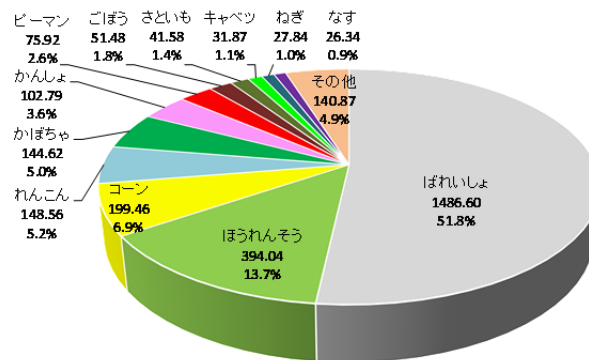
冷凍野菜について、加工形態別に増加している品目を見ると、冷凍および冷凍調理の両方が増加しているのは「ほうれんそう」、冷凍が増加しているのは「ブロッコリー、えだまめ、いんげん、さといも、おくら、アスパラガス」など、冷凍調理が増加しているのは「ばれいしょ、ピーマン」などである。「ばれいしょ、ピーマン」は、調理された形態での購入が増加し、「ブロッコリー、えだまめ、さといも、アスパラガス」は、調理用としての購入が増加し、「ほうれんそう」は、調理用および調理された形態での購入が増加している。

冷凍調理の購入が減少している品目のうち「かぼちゃ、かんしょ、ごぼう」は、惣菜での購入が増加しており (図 26)、購入形態が冷凍調理から惣菜にシフトし、また、「コーン」は、サラダ、キットおよび惣菜サラダでの購入が増加している (図 18) ことから、購入形態が冷凍調理からカット野菜にシフトしていると推察される。

図 20 冷凍調理の品目別千人当たり販売金額

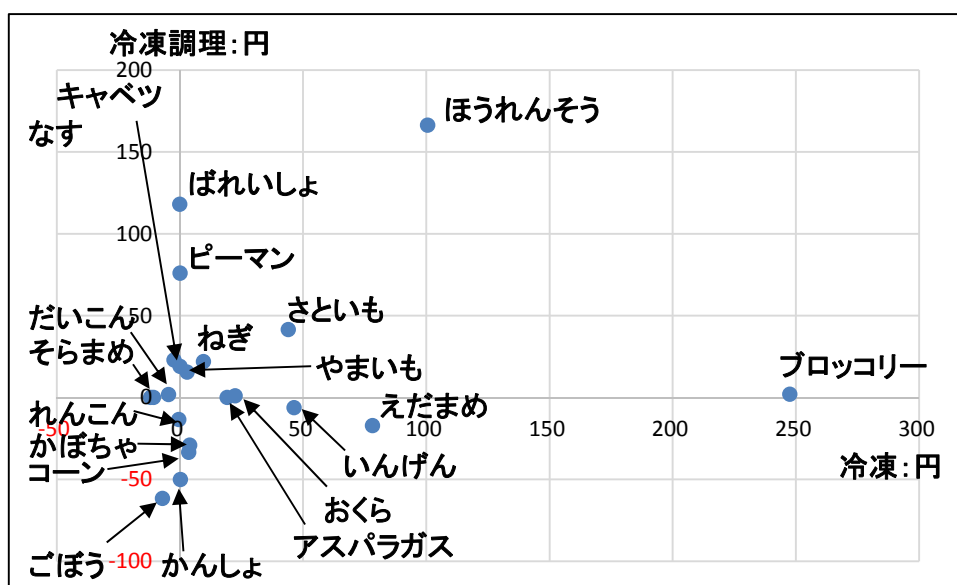


平成 21 年 : 2,668 円



平成 29 年 : 2,872 円

図 21 冷凍野菜の千人当たり販売金額の増減額 (29 年マイナス 21 年)



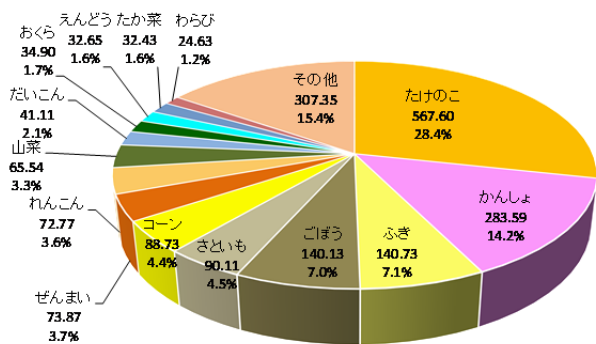
(3) 野菜惣菜

① 和惣菜

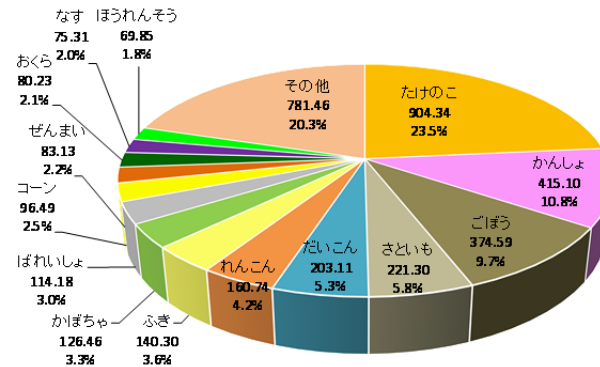
野菜を主体とした和惣菜における千人当たりの販売金額は、平成 21 年 1,996 円、平成 28 年 3,847 円と 92.7%の増加となっている。

主な品目は、「たけのこ、かんしょ、ごぼう、さといも、だいこん、れんこん、ふき、かぼちゃ、ばれいしょ、コーン」などである。増加した品目は、「たけのこ、ごぼう、だいこん、かんしょ、さといも、かぼちゃ、ばれいしょ、れんこん、なす、ほうれんそう、おくら、しょうか、やまいも、小松菜、キャベツ」など、減少した品目は、「えんどう」などである。

図 22 和惣菜 品目別千人当たり販売金額



平成 21 年 : 1,996 円

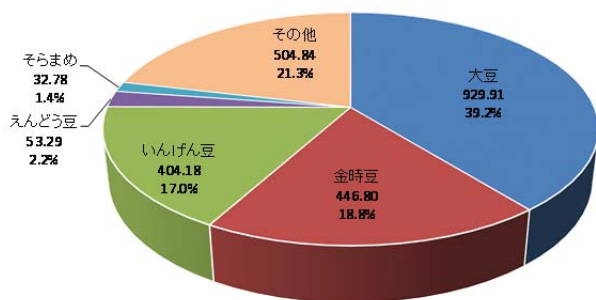


平成 29 年 : 3,847 円

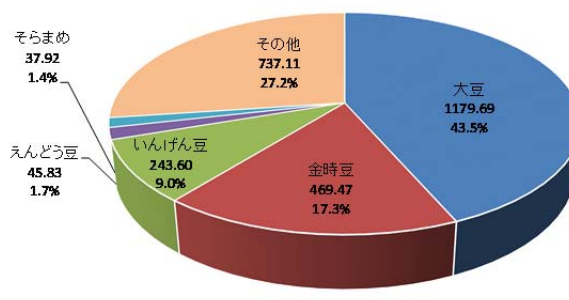
② 豆類 (煮豆+惣菜豆)

豆類における千人当たりの販売金額は、平成 21 年 2,372 円から増加傾向で推移し、27 年に減少したものの、平成 28 年以降は増加傾向に転じ、29 年 2,714 円と 14.1% の増加となっている。

図 23 豆類 (煮豆+惣菜豆) 品目別千人当たり販売金額



平成 21 年 : 2,372 円



平成 29 年 : 2,714 円

主な品目は、「大豆 (黒豆を含む)、金時豆、いんげん豆」などである。増加した品目は、「大豆、金時豆、そらまめ」などである。減少した品目は、「いんげん豆、えんどう豆」などである。「その他」においては、大豆を用いた昆布豆やひじき豆が減少傾向で推移するなか、同じく大豆を用いた野菜豆やサラダ豆が増加傾向で推移している。

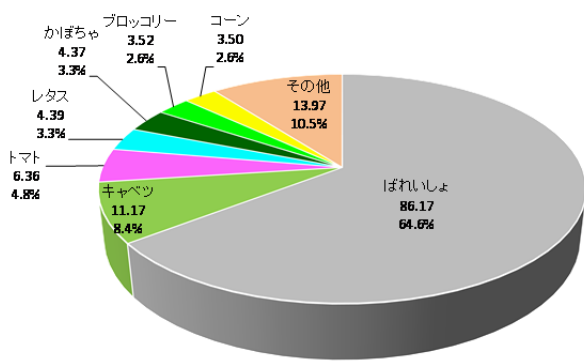
③ 洋惣菜

洋惣菜における千人当たりの販売金額は、平成 21 年 133 円、平成 29 年 195 円と 45.9% の増加と、和惣菜や豆類に比べ少ないものの増加傾向で推移している。

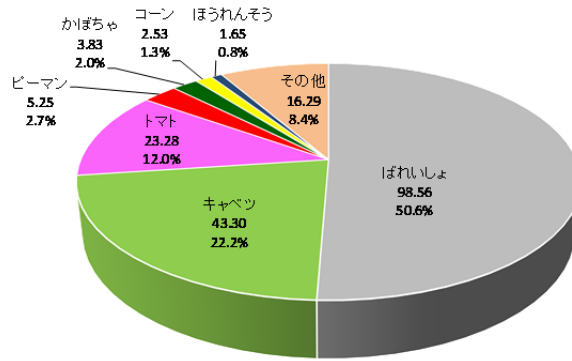
主な品目は、「ばれいしょ、キャベツ、トマト」などである。増加した品目は、「キャベツ、トマト、ばれいしょ」など、減少した品目は、「レタス、ブロッコリー」などである。

キャベツはロールキャベツなどが、トマトは煮込み惣菜などが、最も販売額多い ばれいしょは、コロッケが安定して推移するなか、ポテトグラタンなどが増加している。

図 24 洋惣菜 品目別千人当たり販売金額



平成 21 年 : 133 円



平成 29 年 : 195 円

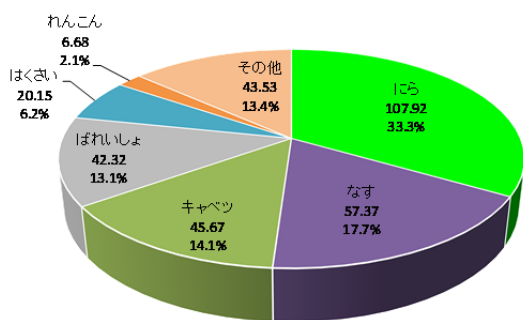
④ 中華惣菜

中華菜における千人当たりの販売金額は、平成 21 年 324 円、平成 28 年 406 円と 25.5% の増加と増加傾向で推移している。

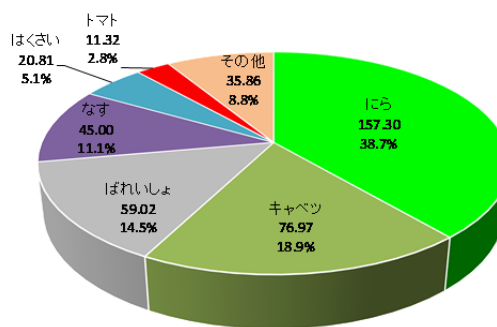
主な品目は、「にら、キャベツ、ばれいしょ、なす、はくさい、トマト」などである。増加した品目は、「にら、キャベツ、ばれいしょ、トマト、だいこん」など、減少した品目は、「なす、れんこん」などである。最も販売が多い「にら」は蕪饅頭など、「キャベツ」は回鍋肉など、「だいこん」は煮物などが増加し、「なす」は麻婆茄子などが減少している

野菜惣菜について、加工形態別に増加している品目を見ると、大幅に増加している和惣菜では、「たけのこ、ごぼう、だいこん、かんしょ、さといも、かぼちゃ、れんこん、ばれいしょ、なす、ほうれんそう、おくら、きゅうり」などが増加し、洋・中華・豆類では、「大豆、キャベツ、にら、トマト、ばれいしょ」などが増加している。

図 25 中華惣菜 品目別千人当たり販売金額



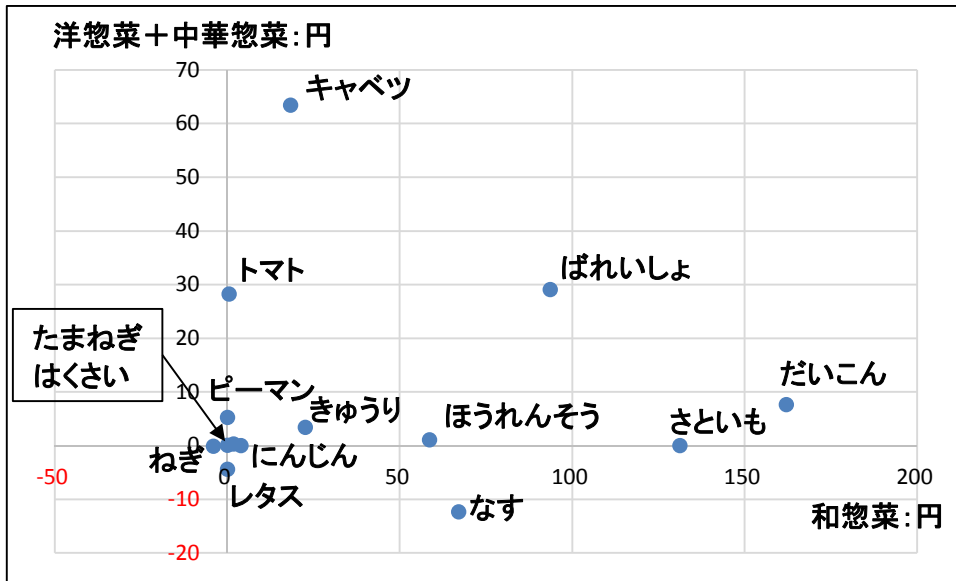
平成 21 年 : 324 円



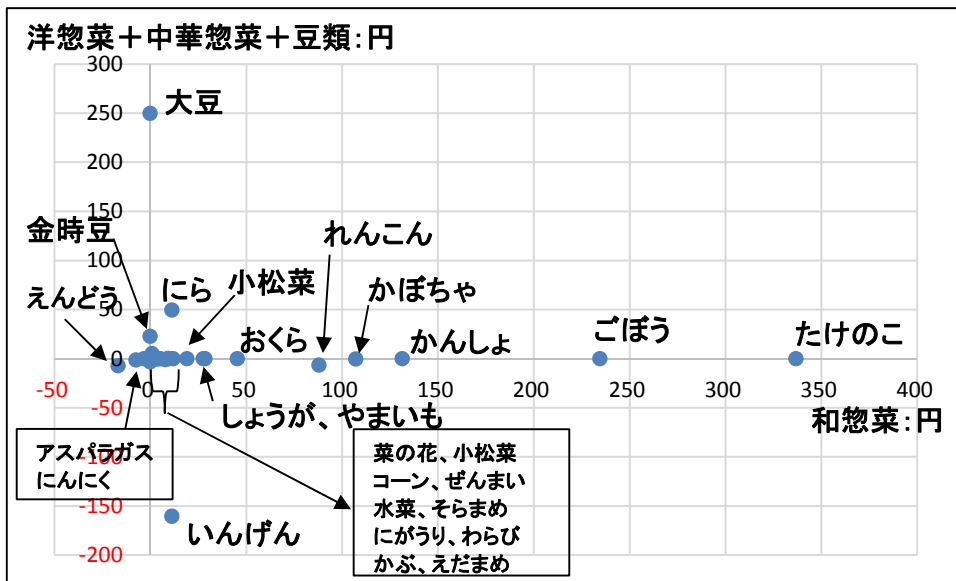
平成 29 年 : 406 円

図 26 野菜惣菜の千人当たり販売金額の増減額 (29 年マイナス 21 年)

(指定野菜)



(他の野菜)



5. 家計調査における購入動向

(1) 生鮮野菜

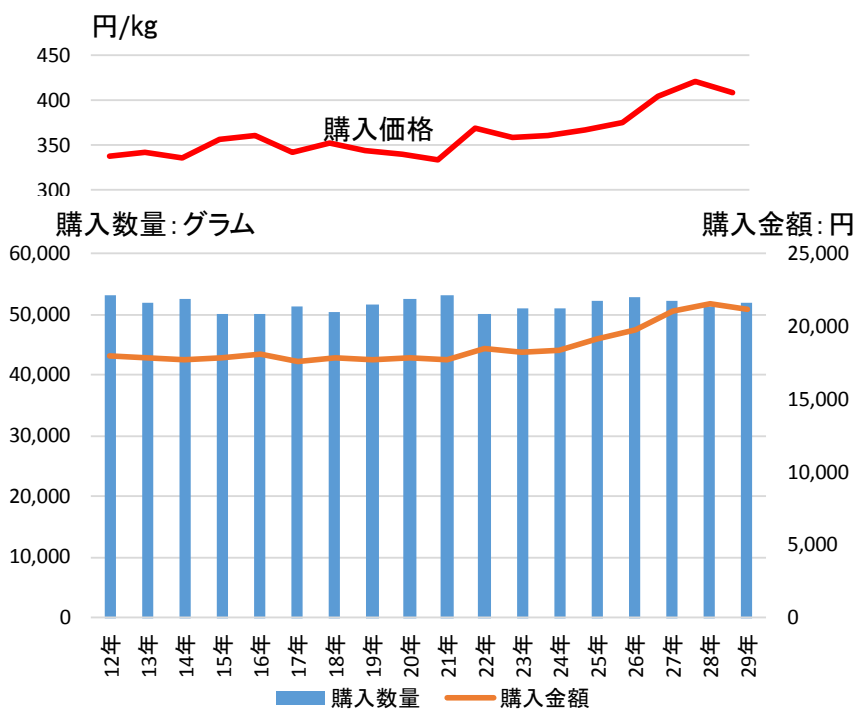
総務省家計調査により、家計における生鮮野菜（もやし、きのこを除く）の購入数量・金額の動向を見ると、22年は天候不順による生鮮野菜の購入価格の上昇により購入数量は減少し、購入金額は増加となったが、24年から26年においては、購入価格が緩やかに上昇するなか、購入数量および購入金額は緩やかに増加している。27年～29年の購入数量は、天候不順により購入価格が高騰するなか52kg前後で推移している。

品目別の購入数量・金額の動向を、購入数量および購入金額の20年～22年と27年～29

年の三ヵ年平均の増減で見ると、以下の四つに分類される。

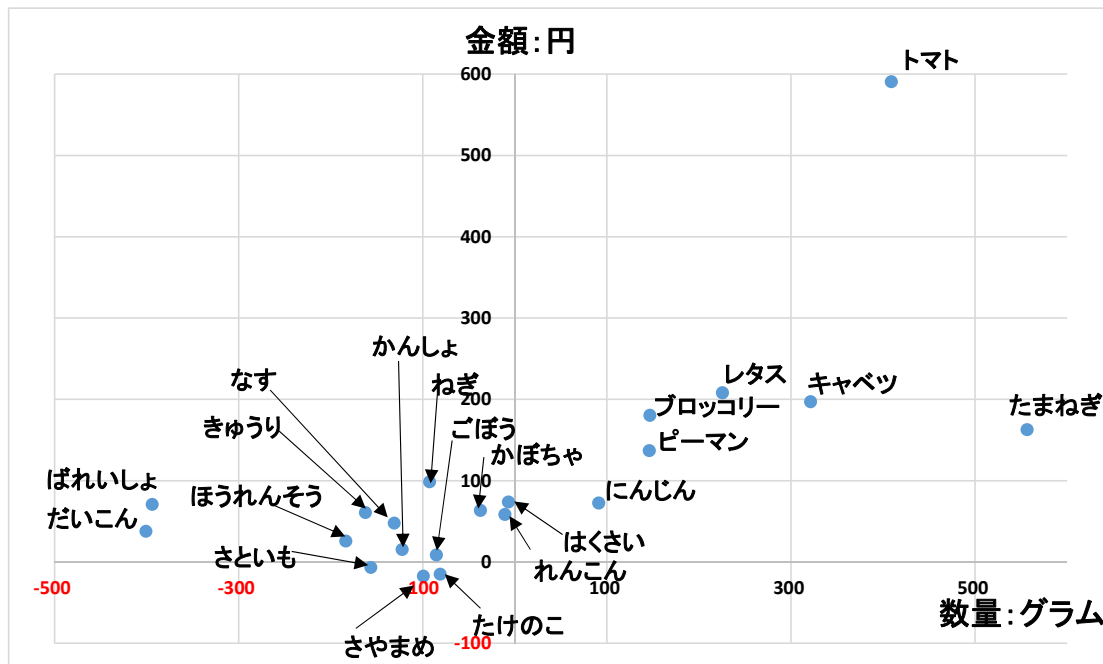
- ① 数量、金額がともに増加している品目
たまねぎ、トマト、キャベツ、レタス、ブロッコリー、にんじん、ピーマン（パプリカを含む）
- ② 数量の増減が少なく、金額が増加している品目
はくさい、れんこん、かぼちゃ
- ③ 数量が減少し、金額が増加している品目
だいこん、ばれいしょ、きゅうり、ほうれんそう、なす、ねぎ
- ④ 数量が減少し、金額の増減が少ない品目
さといも、かんしょ、ごぼう

図 27 家計調査における購入数量、購入金額、購入価格の動向



資料：総務省 家計調査年報

図 28 家計調査における生鮮野菜の購入量、購入金額の増減額（29年マイナス21年）



資料：総務省 家計調査年報

注：20～22年と27～29年の三カ年平均の増減額（一人当たり数量・金額）

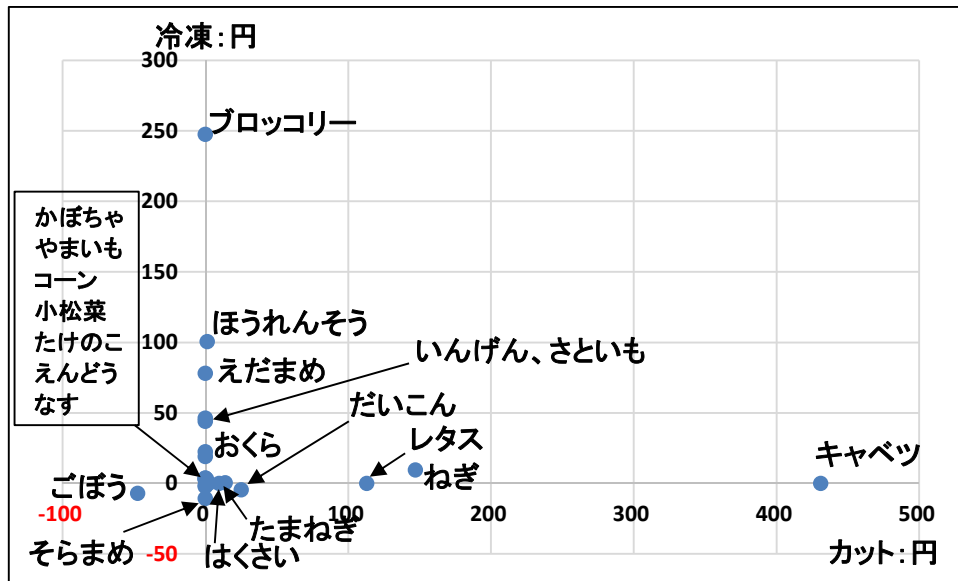
なお、家計調査における生鮮野菜の購入数量・金額には、ホール野菜とともに単品のカット野菜（カット）および単品の冷凍野菜（冷凍）が含まれているため、各年次の変化には、カットおよび冷凍の購入の増減が影響していると推察される。

カットおよび冷凍の千人当たり販売金額は、カットが21年500円から29年1,198円の140%増、冷凍が同1,880円から2,427円の29%増と増加するなか、家計調査における購入数量は、24年から26年では生鮮野菜の購入価格（家計調査）が上昇傾向であるなか増加傾向で推移し、27年以降では生鮮野菜の購入価格が高騰するなか安定して推移している一因は、販売価格が安定しているカットと冷凍の購入増加と推察される。

このため、品目別にカットおよび冷凍の購入の動向を、千人当たり販売金額の21年と29年の増減（29年マイナス21年）で見ると、以下の四つに分類される。

- ① カットが増加している品目：キャベツ、ねぎ、レタス等
- ② 冷凍が増加している品目：ブロッコリー、ほうれんそう、えだまめ、さといも、いんげん、おくら等
- ③ カットが減少している品目：ごぼう
- ④ 冷凍が減少している品目：そらまめ

図 29 カット、冷凍にける千人当たり販売金額の増減額 (29年マイナス21年)



家計調査において購入数量が増加している品目のカットおよび冷凍の千人当たり販売金額を見ると、「キャベツ、レタス」はカットが、「ブロッコリー」は冷凍が大幅に増加している。購入価格が上昇するなか、「キャベツ、レタス、ブロッコリー」の購入数量の増加は、カットや冷凍の購入増加が一因と推察される。

また、購入数量が減少している品目を見ると、「ほうれんそう、さといも」は冷凍が増加し、「ねぎ」はカットが増加している。「ほうれんそう、さといも、ねぎ」は、ホールでの購入が減少し、可食部のみの購入となる冷凍（ほうれんそう、さといも）、カット（ねぎ）の購入にシフトしていると推察される。

購入数量が減少している「だいこん、ばれいしょ、きゅうり、なす、かんしょ」は、カットと冷凍の増減が小さいことから、ホールの購入が減少していると推察される。また、「ごぼう」は、従前から「ささがき」などのカットによる購入が多いことから、カットの購入減少が購入数量減少の一因と推察される。

購入数量の減少が小さい「はくさい、れんこん、かぼちゃ」は、カットと冷凍の増減も小さく、ホールの購入減少も小さいと推察される。

購入数量・金額が増加し、カットおよび冷凍の千人当たり販売金額の増減が少ない「たまねぎ、トマト、ピーマン（パプリカを含む）、にんじん」では、サラダなどの調理用としてホールの購入が増加していると推察される。

生鮮野菜の購入価格が上昇するなか、購入価格が安定しているカットおよび冷凍の購入増加が、家計調査における購入数量増加の一要因と推察される。

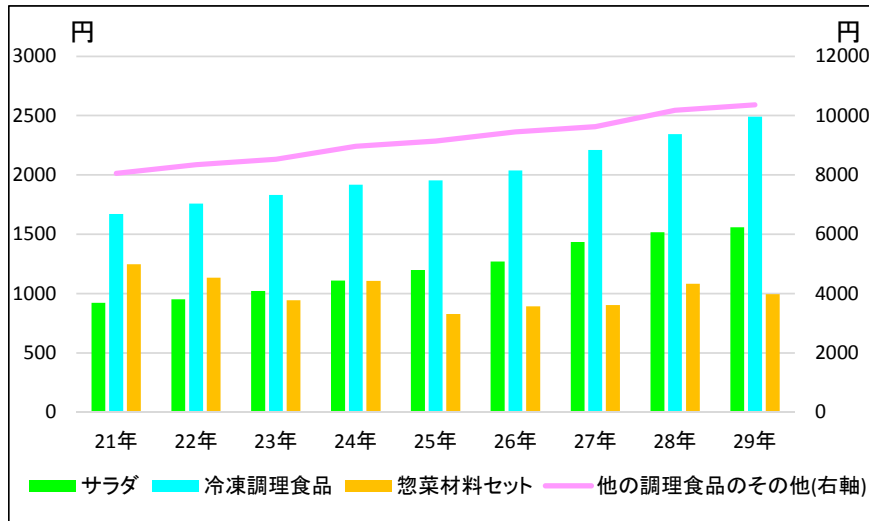
(2) サラダ、冷凍調理、惣菜

他方、野菜の消費は、カットや冷凍の購入が増加しているだけでなく、サラダや惣菜の購入による消費も増加している。

家計調査の「サラダ」「冷凍調理食品」「惣菜材料セット（宅配を含む）」「他の調理食品の

その他（惣菜、缶詰・瓶詰等）」の一人当たり購入金額（二人以上の世帯）を見ると、「サラダ、冷凍調理食品、他の調理食品のその他」は増加傾向にあり、「惣菜材料セット」は減少傾向から26年には増加傾向に転じ、29年は減少している。

図 30 「サラダ、冷凍調理食品、惣菜材料セット、他の調理食品のその他」の一人当たり購入金額の推移



資料：総務省、家計調査年報（二人以上の世帯）

一方、家計におけるサラダ（POS データにおけるサラダ＋惣菜サラダ）、野菜に係る冷凍調理食品（同、冷凍調理）および野菜に係る惣菜（同、野菜惣菜）の購入動向を千人当たりの販売金額で見ると、サラダは、21年1,481円から29年4,876円（229.2%増）、冷凍調理は、同2,668円から2,872円（7.1%増）、野菜惣菜（豆類を含む）は、同4,825円から7,161円（48.4%増）と、サラダや調理された冷凍調理および野菜惣菜の購入が増加している。

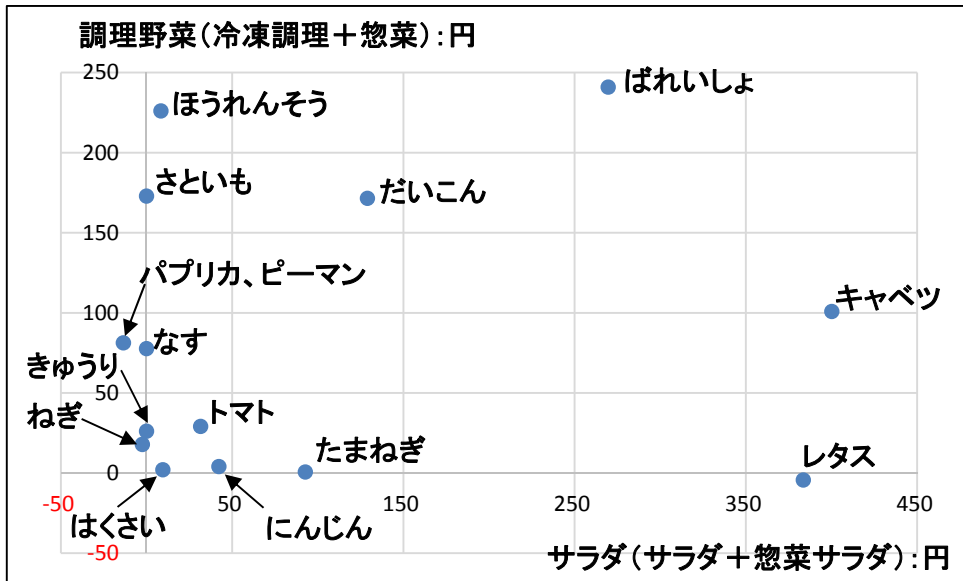
品目別にサラダ（サラダ＋惣菜サラダ）と調理された野菜（冷凍調理＋野菜惣菜）の購入動向を、千人当たりの販売金額の21年と29年の増減額（29年マイナス21年）で見ると、家計調査において購入数量が減少している「だいこん、ばれいしょ、きゅうり、ほうれんそう、なす、さといも、かんしょ、ごぼう」は、サラダや調理された野菜の千人当たり販売金額が増加している。これらの品目の購入形態は、ホール野菜からサラダや調理された野菜にシフトしていると推察される。

また、家計調査において購入数量の減少幅が小さい「はくさい、れんこん、かぼちゃ」、購入数量が増加している「たまねぎ、トマト、キャベツ、レタス」においても、サラダや調理された野菜の千人当たり販売金額が増加しており、ホール野菜による購入数量の増減が小さい品目、または、増加している品目においても、サラダや調理された野菜の購入が増加していると推察される。

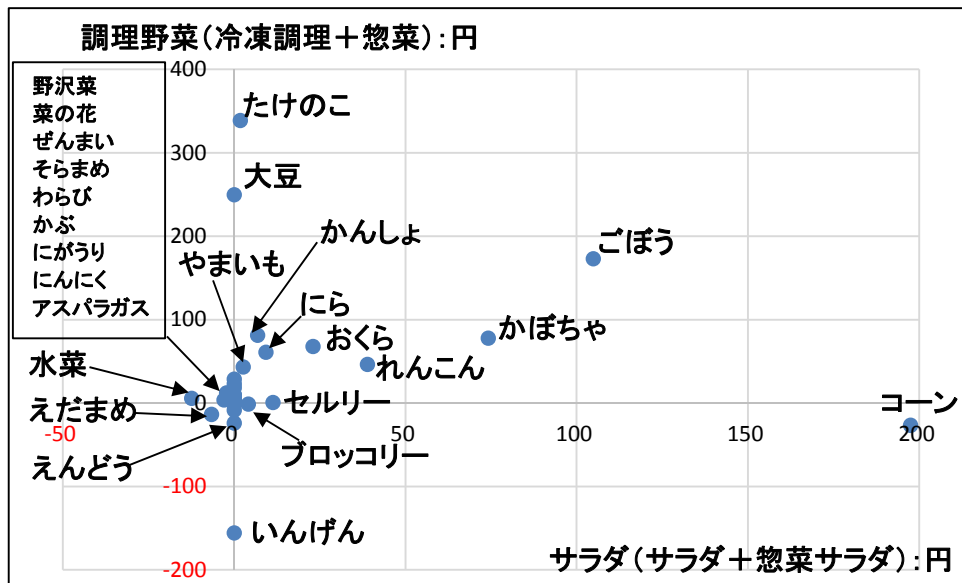
家計における野菜の購入形態は、カットや冷凍が増加するとともに、サラダや調理された野菜の購入が増加していると推察される。

図 31 サラダ等、調理野菜における千人当たり販売金額の増減額（29年マイナス21年）

(指定野菜)



(他の野菜)



6. 今後の野菜消費の動向

(1) 年齢階層別野菜消費の動向

① 生鮮野菜 (もやし、きのこ類を除く)

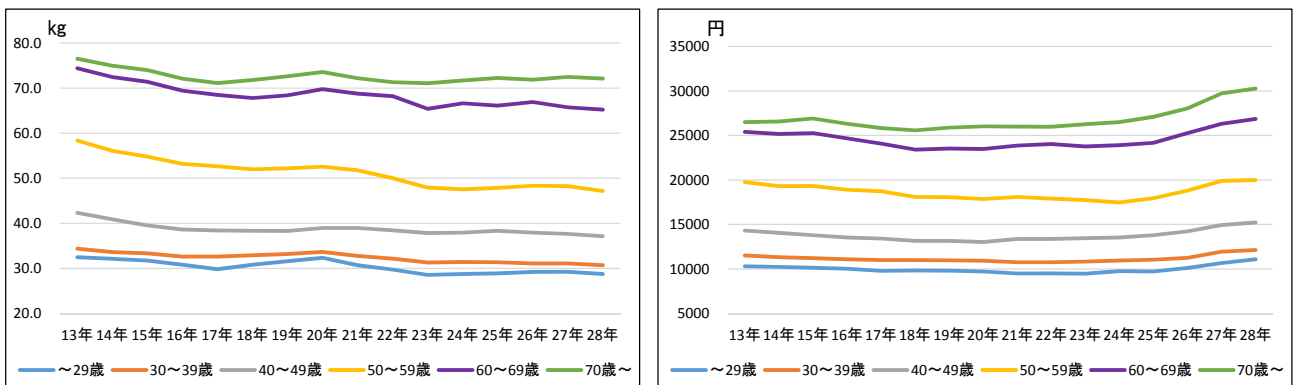
野菜の年齢階層別消費動向を、家計調査における生鮮野菜の世帯主年齢階層別購入数量・金額(一人当たり)で見ると、二人以上の世帯では、購入数量は高い年齢階層ほど多く、70歳以上の階層が最も多い。経年変化を見ると、全ての階層で減少傾向であったが、24年～28年では70歳以上、50歳代、29歳以下の階層が緩やかな増加に転じ、他の階層はほぼ横ばいで推移し、高値となった28年(27～29年平均)では、70歳以上の階層はほぼ横ばい、

他の階層は減少に転じている。

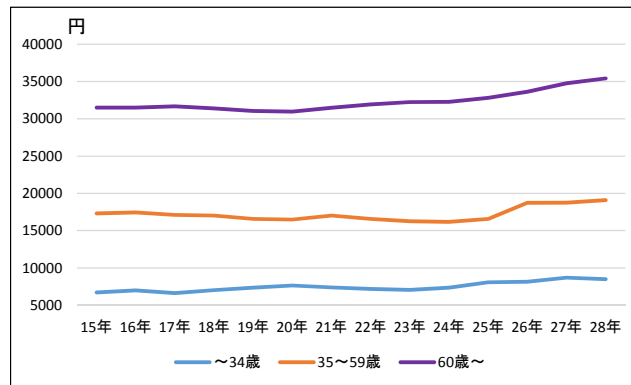
他方、購入金額は、購入数量と同様に高い年齢階層ほど多く、経年変化では、全ての階層で緩やかな減少傾向から増加傾向に転じている。28年は、高値による購入数量の減少から緩やかな増加となっている。

一方、単身世帯（購入金額）では、二人以上の世帯と同様に高い年齢階層ほど多い。経年変化では、34歳以下の階層が、緩やかな増加傾向から28年（27～29年平均）に緩やかな減少に転じ、35～59歳の階層が、緩やかな減少傾向から増加傾向に転じ、60歳以上の階層が、ほぼ横ばいから増加傾向に転じている。

図 32 生鮮野菜の年齢階層別消費動向（二人以上の世帯、一人当たり）
（数 量） （金 額）



(単身世帯：金額)



資料：総務省、家計調査年報

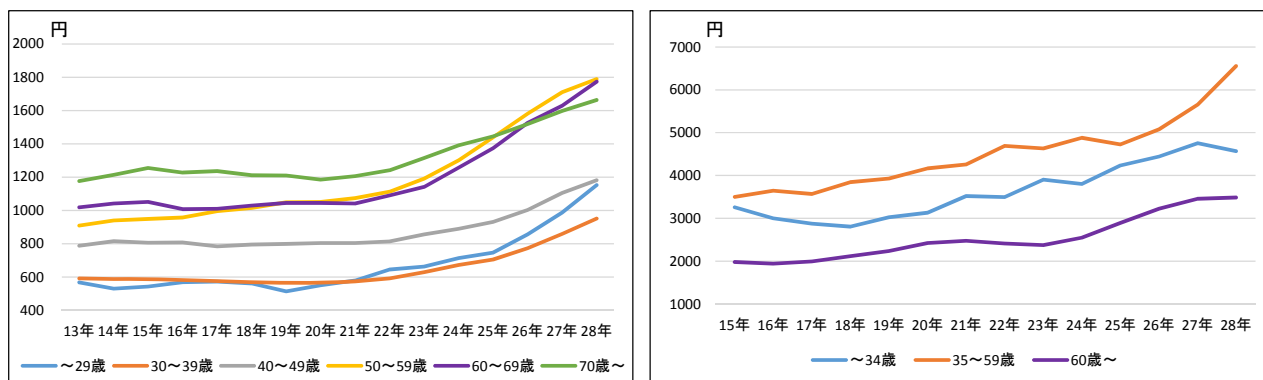
注：14年～29年の三カ年移動平均

② サラダ

サラダの購入金額は、二人以上の世帯（一人当たり）では、50歳以上の階層の購入が多く、経年変化では、全年齢階層が増加傾向で推移するなか、50歳代および60歳代が、近年において大幅に増加しており、最も購入が多かった70歳代を上回った。

単身世帯では、35～59歳の階層の購入が最も多く、近年では大幅な増加傾向となっている。34歳以下および60歳以上の階層も増加傾向であったが、28年では60歳以上の階層が緩やかな増加傾向に、34歳以下の階層では減少に転じている。

図 33 サラダの世帯主年齢階層別消費動向
二人以上の世帯（一人当たり） 単身世帯



資料：総務省、家計調査年報

注：14年～29年の三カ年移動平均

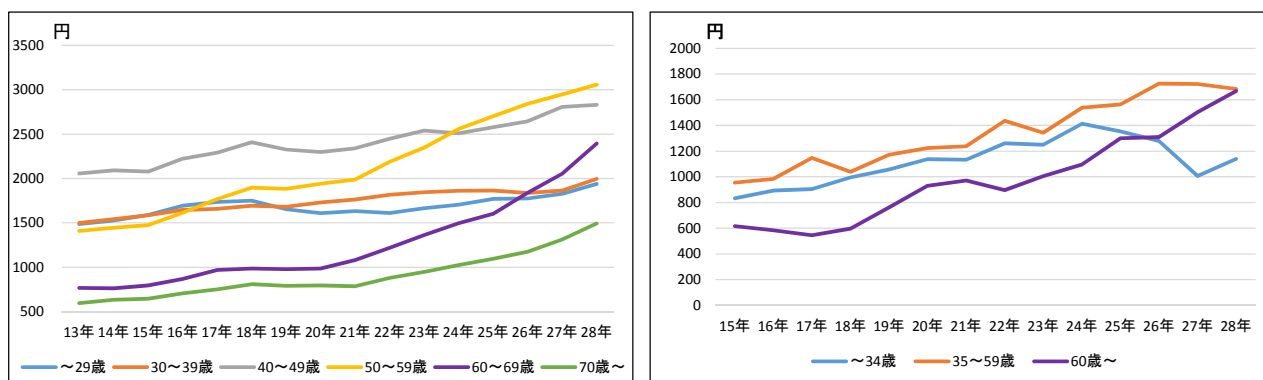
③ 冷凍調理食品

冷凍調理食品の購入金額は、二人以上の世帯（一人当たり）では、40歳代および50歳代の購入が多く、経年変化では、全年齢階層が増加傾向で推移するなか、50歳代が、弁当需要が多いと推察される40歳代を上回り最も購入が多い階層となっている。

単身世帯では、35～59歳の階層の購入が最も多いが、経年変化では、60歳以上の階層が大幅に増加し、35～59歳の階層と同程度の購入金額となっている。一方、34歳以下の階層は、増加傾向から25年に減少傾向に転じているが、28年（27年～29年平均）は生鮮野菜の購入価格が高騰したこともあり増加に転じている。

単身世帯における34歳以下の階層の「他の調理食品のその他（惣菜等）」の購入金額は増加傾向（図35）にあることから、35～59歳の階層における調理食品の需要は、冷凍調理食品から惣菜にシフトしていると推察される。

図 34 冷凍調理食品の世帯主年齢階層別消費動向
二人以上の世帯（一人当たり） 単身世帯



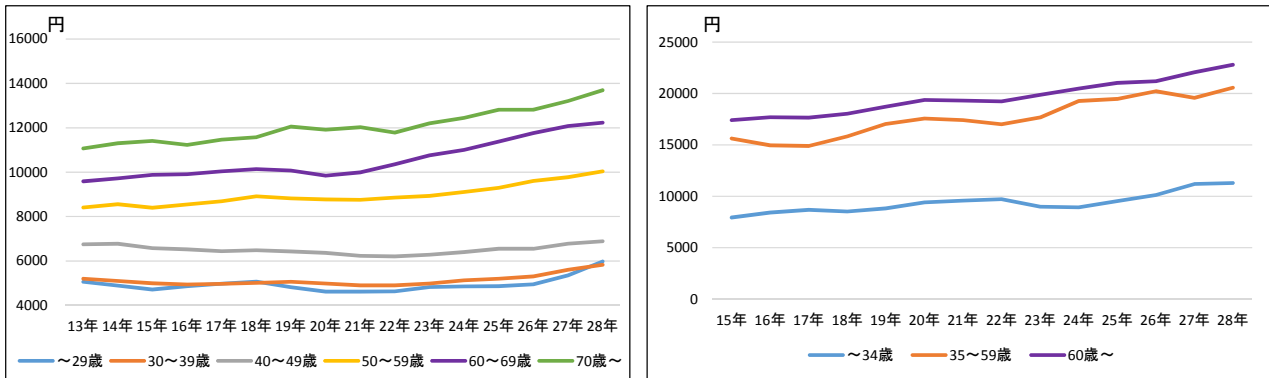
資料：総務省、家計調査年報

注：14年～29年の三カ年移動平均

④ 他の調理食品のその他（惣菜等）

他の調理食品のその他（惣菜等）の購入金額は、二人以上の世帯（一人当たり）および単身世帯で高い年齢階層ほど多く、経年変化では全ての階層で増加傾向となっている。

図 35 他の調理食品のその他の世帯主年齢階層別消費動向
二人以上の世帯 単身世帯



資料：総務省、家計調査年報

注：14年～29年の三ヵ年移動平均

(2) 今後の野菜消費

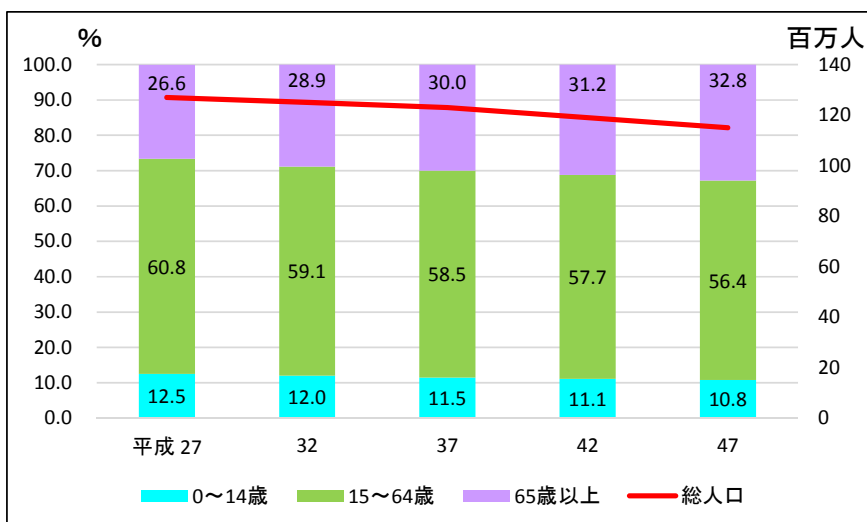
日本の人口は、27年国勢調査において初めて減少に転じ、国立社会保障・人口問題研究所『日本の将来推計人口』（平成29年推計 [出生中位(死亡中位)]）によれば、今後も減少傾向で推移すると予測され、また、65歳以上の人口割合は、27年の26.6%から37年30.0%、47年32.8%に上昇し、高齢化が進展すると予測されている。

また、同研究所『日本の世帯数の将来推計(全国推計)』（平成30年推計）によれば、世帯主が65歳以上の世帯が増加し、そのなかでも単身世帯の増加により高齢の単身世帯が増加すると予測されている。

家計調査における生鮮野菜（もやし、きのこ類を除く）の購入（消費）は、二人以上の世帯および単身世帯の両方において年齢階層が高いほど購入数量・金額が多く、近年は、二人以上の世帯では70歳以上の高齢者階層の購入数量・金額、単身世帯では60歳以上の購入金額が増加傾向で推移している。また、サラダ、他の調理食品その他（惣菜）、冷凍調理食品においても、二人以上の世帯および単身世帯において高齢階層の購入金額は増加傾向で推移している。

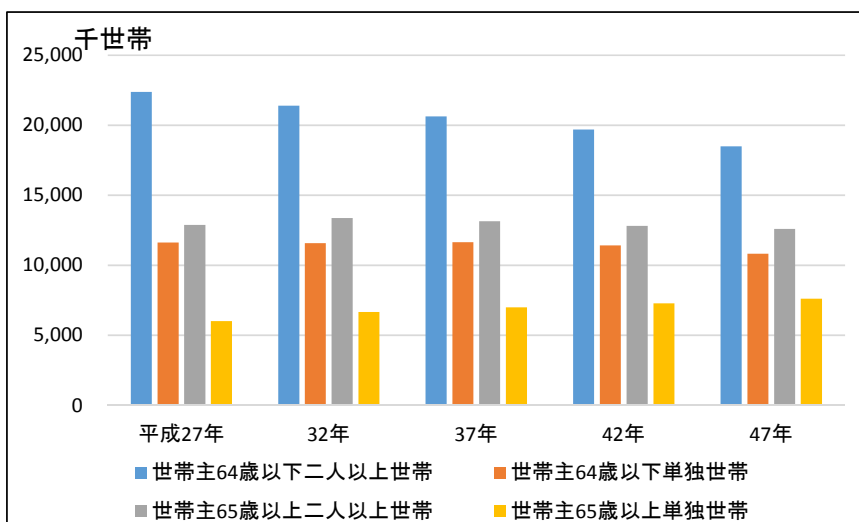
野菜の消費は、高齢世帯や単身世帯の増加、個食化の進展などを背景に、調理が簡便なカット野菜、保存が可能な冷凍野菜、調理の手間がかからない惣菜の購入（消費）が増加傾向で推移している。一方、今後も高齢世帯や高齢の単身世帯の増加が予測されていることから、カット野菜、冷凍野菜、野菜惣菜の購入（消費）は増加傾向が継続すると推察される。

図 36 将来推計人口と年齢別構成の推移



資料：国立社会保障・人口問題研究所『日本の将来推計人口』（平成 29 年推計 [出生中位(死亡中位)]）

図 37 日本の世帯数の将来推計(全国推計)



資料：国立社会保障・人口問題研究所 日本の世帯数の将来推計(平成 30 年全国推計)

注 1) 単独世帯：世帯主のみの世帯（世帯人員が一人の世帯）

会社などの独身寮や間借り・下宿屋などの単身者も含まれるが、寮・寄宿舍の学生・生徒や自衛隊の営舎内居住者などは施設等の世帯としており含まれていない。

注 2) 二人以上世帯：核家族、核家族以外の親族または非親族の世帯、施設等の世帯

Ⅲ 市場規模の推計

1. カット野菜

経済産業省の商業統計および商業動態統計、機構が集計したスーパーのPOSデータ販売金額により「カット野菜製造段階の市場規模」を推計すると、平成24年度カット野菜需要構造実態調査事業報告概要（平成24年1月）で推計された「サラダ・カット・キット」では、平成23年の約1,330億円から26年は約1,910億円、28年は約2,320億円と拡大傾向で推移し、29年は惣菜サラダからサラダへ需要がシフトしたことなどから約2,420億円に拡大したと推計される。一方、惣菜サラダを加えた推計では、23年約2,140億円、26年約3,050億円、28年約3,690億円と拡大傾向と推計されたが、29年は約3,520億円と28年と比べて縮小したと推計される。

原料野菜の市場規模は、同報告概要で示された原価率 0.45 を用いると、29年のサラダ・カット・キットの合計では約 1,090 億円、惣菜サラダを加えた額では約 1,580 億円と推計される。

表2 サラダ、カット、キットの市場規模推計

平成26年商業動態統計			平成26年商業統計		
	百万円	備考		百万円	備考
スーパー販売額	13,369,938	α A	総合・専門スーパー販売額	28,382,263	B
うち飲食料品販売額	9,071,134		推定飲食料品販売額	19,256,582	C=B×A
飲食料品販売額の割合	0.678		機構POSスーパー飲食料品販売額	793,415	D
			うちカット野菜販売額	3,126	E
			カット野菜販売額割合	0.00394	F=E÷D
			スーパーの推定カット野菜販売金額	75,870	G=C×F
			推定値入率	0.3	H
			カット野菜の推定スーパーへの納品額	53,109	I=G×(1-H)
			カット野菜のスーパーへの販売額割合	0.28	J
			カット野菜製造の推定市場規模	190,463	I÷J
平成29年商業動態統計					
スーパー販売額	13,049,653	β	推定飲食料品販売額	20,472,750	C×(β÷α)
うち飲食料品販売額	9,644,030		機構POSスーパー飲食料品販売額	900,223	
			うちカット野菜販売額	4,234	
			カット野菜販売額割合	0.00470	
			スーパーの推定カット野菜販売金額	96,289	
			推定値入率	0.3	
			カット野菜の推定スーパーへの納品額	67,402	
			カット野菜のスーパーへの販売額割合	0.28	
			カット野菜製造の推定市場規模	241,722	

資料：経済産業省「商業統計、商業動態統計」

注1：推定値入率およびカット野菜のスーパーへの販売割合

「平成24年度カット野菜需要構造実態調査事業報告概要」

2. 冷凍野菜

一般社団法人日本冷凍食品協会が公表した冷凍食品の国内生産額および輸入額に基づき平成29年の冷凍野菜（冷凍、冷凍調理、野菜を使用した冷凍調理食品）の市場規模を推定すると、28年の約3,740億円から29年は約3,780億円と拡大したと推計される。

一方、原料野菜の市場規模は、原価率をカット野菜と同じ0.45と仮定すると約1,700億円と推計される。

表3 平成29年冷凍野菜の市場規模推計

	百万円	備 考
国産冷凍野菜生産額	24,001	
冷凍野菜輸入額	42,488	冷凍野菜輸入金額187,171百万円×冷凍農産物国内生産金額の家庭向け割合22.7%
国産冷凍調理食品生産額	280,139	コロッケ、てんぷら、かき揚げ、ハンバーグ、ミートボール、焼売、餃子、春巻、中華饅頭、たこ焼、お好み焼、中華惣菜等
冷凍調理食品輸入額	31,442	フライ類以外（ハンバーグ、たこ焼き、お好み焼等）ただし、野菜を使用していないものも含む。
合 計	378,070	

注：（一社）日本冷凍食品協会の国内生産額、輸入額のデータ（平成29年）を基に、備考欄に記載した算出方法と該当品目の集計を基に機構が推計した。

3. 野菜惣菜

一般社団法人日本惣菜協会の推計によれば、惣菜（惣菜サラダを含む）の市場規模は、29年1兆555億円と、28年9兆8,399億円から大幅に拡大した。

一方、本調査のPOSデータにおける惣菜（惣菜サラダを含む）の販売額は、29年約343億円と、28年約339億円から増加した。このうち野菜を主体とした惣菜（惣菜サラダを含む）および野菜を使用した惣菜の販売額も約200億円と28年の約186億円から増加している。

29年における惣菜（惣菜サラダを含む）の販売額に対する野菜を主体とした惣菜（惣菜サラダを含む）および野菜を使用した惣菜の販売額の割合は、58.2%を占めることから、野菜惣菜および野菜を使用した惣菜における市場規模は、5兆8,520億円と推計される。

また、機構が27年度に実施した惣菜に係る「需要構造実態調査」によれば、惣菜販売額に占める野菜仕入額の割合は14.0%であることから、29年の惣菜原料野菜の市場規模は約8,200億円と推計され、28年の推計値7,560億円から拡大したと推計される。

注

（注1）フライドポテトは、JICFS分類においては「冷凍農産素材」に分類されるが、総務省家計調査においては「調理食品」の「他の調理食品」の「冷凍調理食品」であることから、「冷凍調理」（野菜を主体とした冷凍調理食品）に分類した。

（注2）「冷凍調理」は、餃子などの野菜を使用した冷凍調理食品を含まない。

（注3）「野菜惣菜」は、餃子などの野菜を使用した惣菜を含まない。